

# 彼 岸 原 遺 跡

—福岡県飯塚市弁分所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第216集

2008

福岡県教育委員会

巻頭図版



彼岸原遺跡より龍王山を望む

## 序

福岡県教育委員会では、県営彼岸原団地建替事業に伴い、飯塚市大字弁分に所在する彼岸原遺跡の発掘調査を実施しました。

彼岸原台地と呼ばれる丘陵は、かねてから弥生時代の遺跡が数多く分布するところとして知られていましたが、本格的な発掘調査事例に乏しく、遺跡の内容もあまりわかつていませんでした。今回の発掘調査では弥生時代の集落跡が見つかり、当時の歴史を復元する上で重要な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、地域文化の普及啓発や学術研究の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査及び報告書作成に当たり、御協力をいただいた方々に厚く感謝いたします。

平成20年3月31日

福岡県教育委員会  
教育長 森山 良一

## 例　言

- 1 本書は、県営被岸原団地建替事業に伴い、平成17・18年度に福岡県教育委員会が実施した、被岸原（ひがんばる）遺跡第1次調査及び第2次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び報告書作成は、福岡県土木部住宅管理課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は九州航空株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
- 4 本書に掲載した遺構図の作成は、内村明子・大里弥生・大庭誠佳・久保田あかね・前川陽子・森川留美の協力を得て調査担当者が行った。
- 5 出土遺物の水洗、復元、実測、浄書作業は、調査担当者及び九州歴史資料館・福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府発掘事務所で行った。
- 6 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館・福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府発掘事務所において保管する。
- 7 本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「飯塚」を改変したものである。本書で使用する方位は、国土座標II系による座標北である。
- 8 本書の執筆・編集は吉田東明が行った。

## 本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
3	調査・整理関係者	2
II	位置と環境	3
1	遺跡の地理的環境	3
2	周辺の歴史的環境	5
III	調査の内容	7
1	第1次調査	7
2	第2次調査	8
	遺跡の概要	8
	基本土層	8
	竪穴住居跡	10
	掘立柱建物跡	19
	土坑	23
	溝	36
	その他出土土器	53
	石器・石製品	55
	玉類	58
IV	おわりに	59
	出土土器	59
	検出遺構	60

## 図版目次

巻頭図版　被岸原遺跡から龍王山を望む

図版1 1 第1次調査区西半部全景（東から）

2 第1次調査区東半部全景（東から）

3 第1次調査区中央断面土層（東から）

図版2 1 第2次調査区西半部全景（北上空から）

2 第2次調査区東半部全景（東上空から）

図版3 1 1号竪穴住居跡（上空から）

2 1・2号竪穴住居跡（西から）

3 1号竪穴住居跡石包丁出土状態

図版4 1 3・4号竪穴住居跡（東から）

2 5号竪穴住居跡・8号溝（北から）

3 5号竪穴住居跡掘り方（北から）

図版5 1 6号竪穴住居跡（東から）

2 6号竪穴住居跡砥石出土状態

3 1号掘立柱建物跡（東から）

図版6 1 4号掘立柱建物跡（北から）

2 5号掘立柱建物跡（北から）

3 5号掘立柱建物跡P-5（南から）

図版7 1 1号土坑（南から）

2 2号土坑（南から）

3 3号土坑（東から）

図版8 1 4号土坑（南から）

2 5号土坑（南から）

3 7号土坑（北から）

図版9 1 8号土坑（北から）

2 9号土坑（南から）

3 10号土坑（南から）

図版10 1 11号土坑（西から）

2 12号土坑（北から）

3 13号土坑（南から）

図版11 1 14号土坑（西から）

2 15号土坑（南から）

3 16号土坑（北から）

図版12 1 17号土坑（北から）

2 1・2号溝断面土層（東から）

3 3号溝遺物出土状態（東から）

図版13 1 3号溝遺物出土状態（南から）

2 5号溝（北から）

3 8号溝（北から）

図版14 出土土器①

図版15 出土土器②

図版16 出土石器・石製品・玉類

## 挿 図 目 次

- 第1図 彼岸原遺跡の位置  
第2図 周辺遺跡分布図（1/25,000）  
第3図 調査区位置図（1/2,000）  
第4図 第1次調査区遺構配置図（1/200）  
第5図 第1次調査区土層図（1/40）  
第6図 第1次調査区出土土器実測図（1/4）  
第7図 第2次調査区基本土層図（1/30）  
第8図 第2次調査区遺構配置図（1/300）  
第9図 1・2号竪穴住居跡実測図（1/60）  
第10図 1～4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）  
第11図 3・6号竪穴住居跡実測図（1/60）  
第12図 4号竪穴住居跡実測図（1/60）  
第13図 5号竪穴住居跡・8号溝実測図（1/60）  
第14図 5・6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）  
第15図 7号竪穴住居跡実測図（1/60）  
第16図 1・2号掘立柱建物跡実測図（1/60）  
第17図 掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）  
第18図 3号掘立柱建物跡実測図（1/60）  
第19図 4・5号掘立柱建物跡実測図（1/60）  
第20図 1～4号土坑実測図（1/30）  
第21図 1～10号土坑出土土器実測図（1/4）  
第22図 5・7・9号土坑実測図（1/30）  
第23図 6・8号土坑実測図（1/60）  
第24図 10・11号土坑実測図（1/30）  
第25図 11～16号土坑出土土器実測図（1/4）  
第26図 12～14号土坑実測図（1/30）  
第27図 15～17号土坑実測図（1/30）  
第28図 17号土坑出土土器実測図①（1/4）  
第29図 17号土坑出土土器実測図②（1/4）  
第30図 17号土坑出土土器実測図③（1/4）  
第31図 1・2・5～7・9号溝断面図（1/30）  
第32図 1・2号溝出土土器実測図（1/4）  
第33図 3号溝実測図①（1/60）  
第34図 3号溝実測図②（1/60）  
第35図 3号溝出土土器実測図①（1/4）  
第36図 3号溝出土土器実測図②（1/4）  
第37図 3号溝出土土器実測図③（1/4）  
第38図 3号溝出土土器実測図④（1/4）  
第39図 3号溝出土土器実測図⑤（1/4）  
第40図 3号溝出土土器実測図⑥（1/4）  
第41図 3号溝出土土器実測図⑦（1/4）  
第42図 5・6号溝実測図（1/60）  
第43図 5・7号溝出土土器実測図（1/4）

- 第44図 8・9号溝出土土器実測図（1/4）  
第45図 その他出土土器実測図①（1/4）  
第46図 その他出土土器実測図②（1/4）  
第47図 石器・石製品実測図①（1/2）  
第48図 石器・石製品実測図②（1/2）  
第49図 石器・石製品実測図③（24～26：1/2，27～30：1/3）  
第50図 玉類実測図（1/1）

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯

昭和39年度から43年度の建設以来、40年以上が経過した県営彼岸原団地では、住宅の老朽化に伴い、平成17年度から建て替え事業が行われることになった。

彼岸原団地のある通称彼岸原台地一帯は、かねてから弥生時代の遺跡が点在する所として知られており、当該事業地もまた周知の文化財包蔵地であったため、福岡県教育庁総務部文化財保護課では、福岡県建築都市部住宅管理課と事前協議の上、第1期～第4期の事業予定地のうち、平成17年度工事予定地である第1期工事予定地内の埋蔵文化財の有無について確認調査を行うことになった。

確認調査はバックホーを用いて11月2日に実施した。その結果、第1期工事予定箇所のほぼ全面で遺跡の存在が確認されたため、工事着工前に本発掘調査を実施することになった。工事の進行上、第1期工事予定地内のうち浄化槽設置箇所である公園部分の発掘調査を先行して平成18年1月に実施することとなり（第1次調査区）、住宅棟建設予定地については平成18年度から発掘調査を実施することで協議がまとまった（第2次調査区）。なお遺跡名については穂波町（現飯塚市）教育委員会と協議の上、彼岸原遺跡と呼称することとした。



確認調査状況

## 2 調査の経過

発掘調査の実施に当たっては、地域住民の理解と協力が不可欠であるため、平成18年1月11日にはまず彼岸原団地の自治会長に状況を説明し、大方の了承をいただいた。早速同月13日に発掘器材等を搬入、16日にはバックホーを搬入して表土掘削を開始し、17日から作業員による人力掘削を開始した。第1次調査区は面積も狭く、また予想どおり遺構・遺物ともに希薄であったため同月27日には埋め戻しも完了し、当初の予定どおり調査を終了した。

第2次調査は工事の工程上同年6月までに発掘調査を終了しなければならず、通常以上に作業人員を増員し急ピッチで調査を進める必要に迫られた。地元穂波町（現飯塚市）教育委員会の協力を得て3月に作業員を募集し調査体制を整え、4月12日からバックホーを搬入し発掘調査を開始した。表土の掘削に当たっては敷地内で排土処理をしなければならなかつたため、まず西半部を掘削、調査終了後に排土を反転して東半部を調査することとした。

4月18日には作業員を集めて諸説明や道具準備等を行い、翌19日から本格的に掘削作業を開始した。調査区内は予想以上に搅乱が多く、遺構掘削よりも搅乱の除去に労力を費やさざるを得ず、また特に3号溝遺物集中箇所の掘削に手間取ったものの、5月24日に西半部の空中写真撮影を実施、5月31日に図化作業や写真撮影も終えて、翌6月から表土反転作業を開始した。作業工程が若干遅れ気味だったので表土掘削と併行して遺構確認作業を行い時間の短縮を図る一方で、東半部が予想以上に遺構が希薄だったのと、折しも梅雨の時期に降雨に見舞われなかつたことが幸いし、6月22日



建替後の彼岸原団地

に東半部の空中写真撮影を行い、26日には図化作業、写真撮影も終了し、30日には表土の埋め戻しも完了して予定どおりに全ての作業を終了することができた。なお6月25日には地域住民向けの報告のため現地説明会を開催し、雨の中にもかかわらず多くの方々の参加をいただいた。

### 3 調査・整理関係者

平成17・18年度の発掘調査関係者及び平成19年度の整理作業関係者は以下のとおりである。

#### 福岡県教育委員会

	平成17年度	平成18年度	平成19年度
<b>総括</b>			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	清水 圭輔	橋崎 洋二郎
秘書部長	中原 一憲	大島 和寛	大島 和寛
文化財保護課長	久芳 昭文	磯村 幸男（本副理事）	磯村 幸男（本副理事）
副課長	川添 昭人	佐々木隆彥	佐々木隆彥
参考	新原 正典	新原 正典	新原 正典
課長補佐	安川 正郷（本参考事）	安川 正郷（本参考事）	中園 宏（本参考事）
課長技術補佐	木下 修（本参考事）	池辺 元明（本参考事）	池辺 元明（本参考事）
	池辺 元明（本参考事）	小池 史哲（本参考事）	小池 史哲（本参考事）
<b>庶務</b>			
管理係長	稻尾 茂（本参考事補佐）	井手 優二	井手 優二
管理係	潤上 大輔	潤上 大輔	潤上 大輔

#### 調査・整理

調査第一係長	小池 史哲（本参考事補佐）	小田 和利	小田 和利
調査第一係	吉田 東明（調査担当）	吉田 東明（調査担当）	吉田東明（報告書作成）
調査補助員	大里 弥生	大里 弥生	海出 淳平

#### 発掘作業員

池田 直子	市川 典子	内村 明子	太田美佐子	大庭 淑佳	北野 源子	久保田あかね
栗木 富子	高山 清	讃本 長利	武道 義徳	田中 卓男	谷口 秀子	長坂 勇
中村 静美	永山 康子	西岡 昭子	西谷とも子	濱田 正道	深町富士子	福本フサ子
藤田 等	前川 陽子	朝井 勝子	森川 留美	星住 光信	矢野 洋子	

なお、発掘調査及び整理作業に当たり、御理解・御協力いただいた関係各位に厚く感謝申し上げます。

## II 位置と環境

### 1 遺跡の地理的環境

彼岸原（HIGANBARU）遺跡は、福岡県飯塚市（旧嘉穂郡穂波町）大字斧分614に所在する。

本遺跡の所在する嘉穂盆地は福岡県のはば中央に位置し、東は金国・戸谷ヶ岳山地を挟んで豊前田川郡と接し、南は古処山・馬見山が聳える古処山地を越えて朝倉郡と接し、西は三郡山から龍王山、笠置山へと連なる三郡山地を境に筑紫平野と接しており、この三方を山々に囲まれ、遠賀川が流れを向ける北側が唯一の開口部となる。遠賀川は盆地の中央にある飯塚市の市街地で嘉麻川と穂波川が合流し、さらに下流の直方市で彦山川や大鳴川と一つとなり、北流して玄界灘へと注ぐ。県内第2位の一級河川である。嘉穂盆地はこの遠賀川とその支流による開拓、沖積作用によって形成された地形であり、複雑な支流の流れによって大小様々な盆地、低丘陵が各所に見られる。

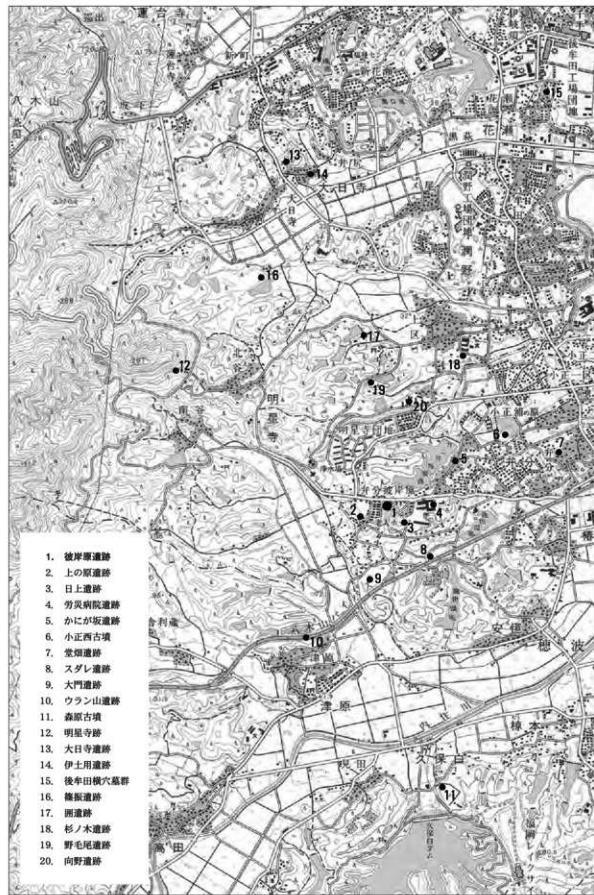
本遺跡は嘉穂盆地の西部、龍王山の東側に派生した、通称彼岸原台地と呼ばれる標高60～70mの丘陵南端部に位置する。三郡山地の地質は花崗岩類と三郡変成岩、秩父変成岩、蛇紋岩類から成り、北部の大鳴山地へと連なる。この三郡変成岩と断層関係で接する町野古成層は竜王山中腹から東麓、八木山東麓、笠置山南麓にかけて広く分布する弱変成の古生層で、この層中に含まれる輝緑凝灰岩は立岩、焼瓦正遺跡で製作されたとして著名な石包丁の素材とされるものである。また嘉穂盆地には古第三紀層（直方層群）から成る標高100mに満たない緩やかな丘陵が起伏している。この直方層群は中に石炭層が多数挟んでおり、この地層の分布地域が筑炭田と呼ばれている。

江戸前期に貝原益軒によって記された「筑前国統風土記」には、嘉穂盆地を二分する嘉麻郡と穂波郡は「山深くて薪材ゆたかに、川流れて旱災のうれへなく、土地肥沃にして種植の利多。邊鄙にして民俗いやしく、言語たなしといへども、頗實朴にして厚きに近し。嘉穂穂波皆好郡とすべし」とあり、近世までは山野水田に開まれた穏やかな農村地であった。そのころ既に「燃石、遠賀、鞍手、嘉麻、穂波、のあたりの山野に有之、村民是を探りて薪代りに用う」と記されるように石炭の存在が知られており藩行として採炭されたが、明治2年の太政官布告によって採掘が民間に開放され、これを機に目尾、鯨田、嘉麻、上三緒などの諸炭坑の開発が始まった。その後中央資本の進出とともに石炭産業はますます盛んになり、戦後まもなく最盛期を迎えるに至った。石炭採掘の盛況とともに筑豊一帯の諸産業は活況を呈し、人口は増加し、多くの炭坑住宅や娛樂施設も建設されたという。彼岸原遺跡の一带も昭和30年頃まであたり一面茶畠だったそうだが、40年代前半にかけて急速に宅地化が進み景色も一変した。造成工事中に土器や石器が採集され、遺跡の存在が明らかになったのはちょうどその頃である。

明治以降産炭地として殷賑を極め、日本の近代化を支え続けた筑農地域であったが、エネルギー革命以降は急速に衰退の一途をたどり、かつての面影を失いつつあった。しかし近年では基幹産業の再編を機軸に方向転換を図り、さらには平成18年3月26日に旧飯塚市、穂波町、筑穂町、庄内町、額田町の1市4町の合併も行われ、面積214.13km<sup>2</sup>、人口13万人の新飯塚市が誕生、筑農の中核都市として目下発展の途上にある。



第1図 彼岸原遺跡の位置



1. 彼岸原遺跡
2. 上の原遺跡
3. 日上遺跡
4. 労災病院遺跡
5. かにが坂遺跡
6. 小正西古墳
7. 常葉遺跡
8. スダレ遺跡
9. 大門遺跡
10. ウラシ山遺跡
11. 森原古墳
12. 明聖寺跡
13. 大日寺遺跡
14. 伊土用遺跡
15. 後牛田横穴墓群
16. 橿原遺跡
17. 圓鏡跡
18. 杉ノ木遺跡
19. 野毛尾遺跡
20. 向野遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

## 2 周辺の歴史的環境

彼岸原遺跡の位置する嘉穂盆地西部の丘陵上は、弥生遺跡の濃密な分布地として知られるが、これと遡る縄文時代後・晩期の遺跡は春田遺跡や北古賀遺跡、木下遺跡など、沖積部の微高地に立地する傾向にあり、現在のところ丘陵上からは見つかっていない。丘陵への進出は弥生時代以降に果たされるようである。春田遺跡は飯坂市高田にあり、縄文晩期の土坑54基が検出された遺跡である。北古賀遺跡は北古賀にあり、後・晩期の土器、石鏃、切目石錘が採集、紹介されており古くから著名である。木下遺跡は長尾にあり、後・晩期の住居跡、土坑等が見つかっている。

弥生時代になると前代に比べて遺跡数は急激に増加し、特に丘陵上への進出がめざましい。近隣の弥生時代の遺跡を概観してみると、同一丘陵上では弥生時代前期後半～中期前半の円形貯蔵穴群が34基見つかった上の原遺跡、ほぼ同時期の住居跡、貯蔵穴、木棺墓が検出された日上遺跡、弥生前期の土器や玄武岩製の石斧が採集された堂畠遺跡、病院宿舎建設の際に弥生前期の壺をはじめ多くの遺物が出土した公舎遺跡、病院建設の整地工事の際に住居跡が確認され、前期～中期の土器や石臼丁が出土した労災病院遺跡などがある。また谷一つ隔てた南側の丘陵上には、弥生時代前期後半～中期の円形住居跡、木棺墓、土壙墓、壺棺墓群などが発見され、特に子持ち壺や石劍切先嵌入壺棺人骨の出土で著名なスダレ遺跡をはじめ、前期後半～中期初頭の円形住居跡、貯蔵穴、土壙墓、石蓋土壙墓が見つかったウラン山遺跡、前期末～中期初頭の円形住居跡、貯蔵穴が見つかった大門遺跡などがある。これらの遺跡は、ほぼ弥生時代前期後半に集落の形成を始めており、この頃一斉に丘陵上への進出を果たしたことがうかがえる。その後弥生時代中期前半頃を境にいったん集落の造営は途絶えるが、少し場所を変えて中期後半にも引き続き集落が存続する。後期の遺跡は激減し、わずかに先述の大門遺跡で見られる程度に過ぎない。

弥生時代の動向についてさらに周辺を見渡してみると、高田では前期後半～中期前半の堅穴住居跡や土坑が見つかった森遺跡、中期の円形住居跡や土坑が検出された箱掛遺跡、清水遺跡、佛田遺跡、後期後半～古墳時代前期初頭の箱式石棺墓28基、石蓋土壙墓5基をはじめ、中期～後期の住居跡、土坑、溝など豊富な遺構が見つかった向田遺跡などがある。向田遺跡7号石棺墓からは「長宜孫子」銘内行花文鏡や管玉が出土し、他の石棺墓や石蓋土壙墓からも鉄剣、素環頭刀子、鐵鏃などが出土しており重要である。久保白では前期末～中期初頭の土坑が検出された原崎遺跡、津原では中期の円形住居跡、掘立柱建物跡、土坑が見つかった中ノ前遺跡、山ノ下遺跡、中～後期の大溝が見つかった香塚遺跡などがある。これらの遺跡はいずれも近年実施された圃場整備に伴う発掘調査によって発見されたものであり、多くは沖積微高地に立地する。丘陵上に展開する弥生時代の遺跡の消長と対比させると興味深い結果となろう。

ところで、嘉穂盆地といえればやはり前漢鏡10面等が出土した立岩堀田遺跡、石臼丁製造遺跡とされる立岩下の方遺跡、立岩焼ノ正遺跡など、彼岸原台地の北東約4kmにある立岩丘陵上の弥生遺跡が著名であるが、周辺地域の調査事例に乏しく未だ不明な点が多いだけに、今回の調査成果を含め周辺地域の様相は当時の社会情勢を知る上で重要な手がかりとなるだろう。

古墳時代になると、三角縁波文盤三神三獣鏡が出土した忠臣古墳や、盤竜鏡・画文帶神獸鏡など豊富な副葬品が出土した前方後円墳山の神古墳などが近隣にあり、広大な生産基盤を基に首長層の形成が着実に行われていたようである。彼岸原台地においては古墳時代前・中期の遺跡は顯著ではないが、後期になると小型円墳の造営が始まる。その中で注目すべきは、平成8年から宅地造成に伴い発掘調査がおこなわれた小正西古墳である。この古墳は彼岸原台地の北東端に位置する直径約30mの大型円墳で、墳丘に円筒・形象埴輪を樹立し、二基ある横穴式石室からは人骨とともに豊富な副葬品が出土したことで一躍有名になった。現在ではその重要性から古墳公園として保存・整備が行われ、憩いの場として地域に親しまれる。その他、先述の上の原遺跡やウラン山遺跡、箱掛遺跡、向田遺跡などで横穴式石室を主体とする後期古墳が見つかっている。

嘉穂地方に関する最古の文献資料は、「日本書紀」535年（安閏二）の鎌、穗波両屯倉の設置に関するものである。現在、両屯倉とも設置場所は不明だが、少なくともこの嘉穂地方一帯が肥沃な穀倉

地帯として重要視され、また北部九州を統括する上で中央勢力から重きを置かれていたことがこの文献から推察される。

古代においてはこの地域は交通上重要なルートとなっており、大宰府から豊前へと通じる官道が整備される。その沿線に位置するのが大分廃寺である。優美な新羅系古瓦を出土することで古くから知られていたが、発掘調査の結果、法起寺式伽藍配置の採用が推定されるに至った。現在塔跡が国指定史跡に指定されている。この大分廃寺と同じ頃の遺跡はほとんど見つかっておらず、不明な点が多いのが現状である。

#### 参考文献

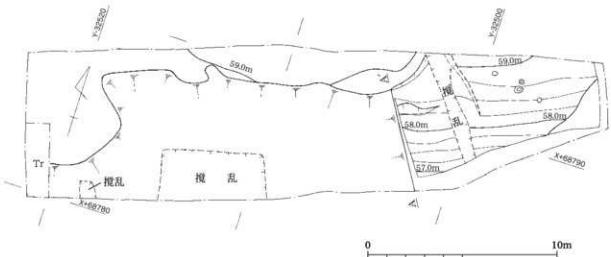
- 貝原益軒編 1943 「筑前國純風土記」福岡県史資料 総第四輯 福岡県  
立岩遺跡調査会 1977 「立岩遺跡」  
穂波町教育委員会 1995 「穂波町ものたり」  
福岡県教育委員会 1983 「八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」  
穂波町教育委員会 1976 「スダレ遺跡」 穂波町文化財調査報告書 第1集  
穂波町教育委員会 1986 「大門遺跡」 穂波町文化財調査報告書 第2集  
穂波町教育委員会 1987 「上の原遺跡」 穂波町文化財調査報告書 第3集  
穂波町教育委員会 1989 「穂波地区遺跡群 第1集」 穂波町文化財調査報告書 第4集  
穂波町教育委員会 1990 「穂波地区遺跡群 第2集」 穂波町文化財調査報告書 第5集  
穂波町教育委員会 1991 「穂波地区遺跡群 第3集」 穂波町文化財調査報告書 第6集  
穂波町教育委員会 1992 「穂波地区遺跡群 第4集」 穂波町文化財調査報告書 第7集  
筑町教育委員会 1986 「木下遺跡」 筑町文化財調査報告書 第1集



第3図 調査区位置図 (1 / 2,000)

### III 調査の内容

#### 1 第1次調査(図版1、第4・5図)

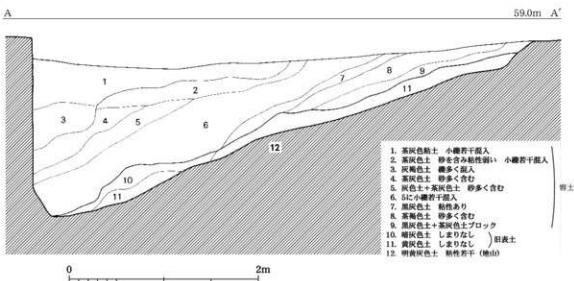


第4図 第1次調査区遺構配置図(1/200)

試掘調査時に予想していたとおり、本調査区は旧地形では台地の斜面に位置し、後世の造成によって現況のような平坦地を形成したことが発掘調査の結果明らかとなった。遺跡の標高は57m～59mを測り北側から南側へ向けて大きく傾斜する。調査面積は約160m<sup>2</sup>。

土層図を見ると、第1層から第9層までは客土層である。これは昭和40年前後の団地造成時に台地を大きく削り、その土砂をこの場所に積み上げたことによって形成された層である。第10・11層は旧表土、第12層上面がこの調査区の遺構面で、この層より下層は無遺物層である。遺物は主に旧表土である第10層・第11層から出土したもの。

調査を進めるにしたがい、客土層が予想以上に厚く、また遺構・遺物とも非常に少なかったため、東側の遺構検出と旧地形復元、土層の確認を行ったのち調査を終了することとした。検出遺構はピット数基、出土遺物は弥生土器等1袋程度である。これらの遺物は隣接する第2次調査区の遺構群から流入したものであろう。



第5図 第1次調査区土層図(1/40)



第6図 第1次調査区出土土器実測図（1/4）

#### 出土土器（第6図）

壺（1） 1は底部片。壺として報告するが、壺でも似た形状のものがある。端部はやや丸みを帯び底面はわずかに上げ底となる。底径7.0cm。

甕（2・3） 2は口縁端部、肩曲部ともに丸みを帯びる。口径30.0cm。3もやはり口縁端部、肩曲部ともに丸く、胴部上半は直立する。外面には継ハケ目がかすかに残る。

#### 2 第2次調査（図版2、第8図）

##### 遺跡の概要

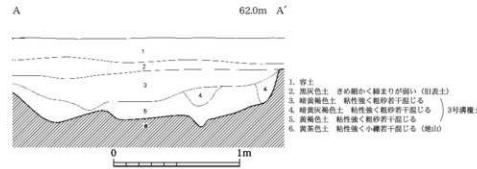
第2次調査区では試掘調査の時点で既に相当数の弥生土器が出土していたこともあり、遺構がほぼ全城に展開することが予想されたが、調査の結果、円形竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡5棟、土坑17基、溝9条、その他ビット多数を検出することになった。出土遺物はパンケース25箱を数える。

竪穴住居跡は調査区の中央から西側にかけて広がり、その北側には1～3号溝が東西へと直線的に伸びる。この溝の北側には不整形の落ち込みが見られる。西端には1・2号掘立柱建物跡があり、3～5号掘立柱建物跡は竪穴住居跡群より東側に位置する。貯蔵穴である14～16号土坑は調査区の東端にあり、西側には見られない。また後世の削平や掩埋等により全体的に遺構の遺存はあまり良くなく、部分的に遺構が著しく破壊を受けた所もある。

標高は61m前後を測り全体的に平坦な地形であるが、やはり竪穴住居跡がある中央から西側一帯が若干高く、それ以外の所へ向かって緩やかに傾斜する。調査面積は2,360m<sup>2</sup>。

#### 基本土層（第7図）

第7図は第2次調査区の北東端、3号溝がある箇所の壁面土層図である。第1層は团地造成時の客土層で、第2層がそれ以前の旧表土層である。北端部を除いて基本的に包含層の形成は見られず、こ

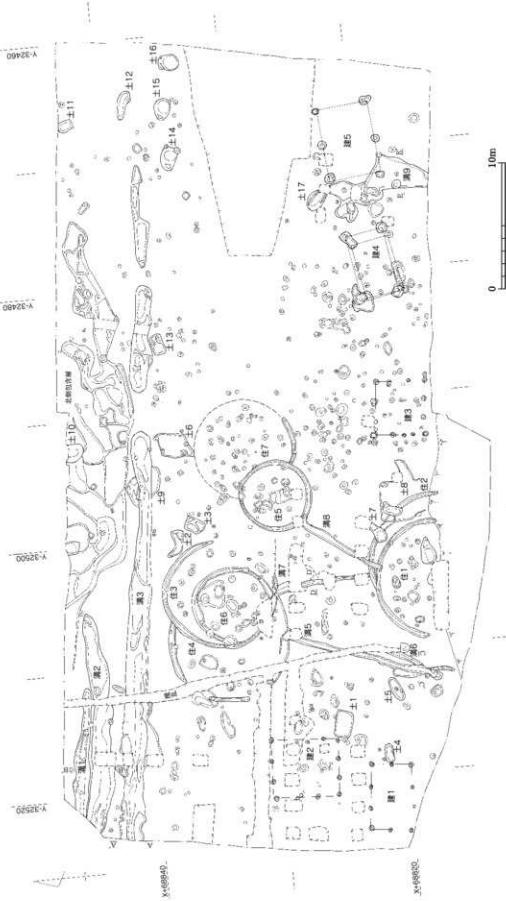


第7図 第2次調査区基本土層図（1/30）

の第2層直下、第6層上面が遺構検出面となる。第6層の小礫の混じった黄茶色土は遺物を全く含まない遺跡の地山層となる。本調査区では広範囲に確認され、かなり厚く堆積するようだが、場所によっては、例えば北端中央付近ではほとんど小礫を含まない層へと暫時に変化する。また東端は大きく削平を受け、第6層の下層である風化裸層が露出する。

第3～5層は3号溝の覆土である。粗砂が若干混じる黄褐色土を基本としており、大半の遺構覆土は同質の土であるが、14～16号土坑だけはやや異なる。これは14～16号土坑がもともと袋状に深く掘削された貯蔵穴であり、埋没過程で壁面の崩落土や他の掘削土が急に堆積したことによるのであろう。また古代の遺構である1～3号掘立柱建物跡の覆土は灰褐色土を基本とする。

第6圖 第2次調查長效遺情配置圖 (1/300)



## 堅穴住居跡

### 1号堅穴住居跡（図版3、第9図）

調査区中央南側に位置する円形の堅穴住居跡で、南半部を大きく削平される。2号堅穴住居跡、8号溝と重複しており、先後関係では2号住居跡よりも新しく8号溝よりも古い。直径は9.5mを測りかなり大型である。屋内の周縁には幅40cmの壁溝を巡らせる。この壁溝の土層を見ると、第2層に焼土塊が含まれており焼失住居の可能性もある。床面までの深さは最も深い北東側で30cm。床面上でもやはり焼土を検出している。

床面ではP1～P4の4つの主柱穴と中央土坑P5を検出した。P5は大きく搅乱を受け一部しか残っていない。主柱穴は深さ25cm～60cmとややばらつきがある。P1～P4の配置からこの堅穴住居跡の主柱は8本だったことが想定される。

出土遺物はあまり多くない。下記の土器の他に第47図3の石包丁、第48図22の砥石が出土した。

### 出土土器（第10図）

壺（1～5） 1は鈎先状になる壺の口縁部。高坏の可能性もある。外端部は四角く整形されわずかに垂下する。口径22.4cm。2・3は遠賀川以東を中心に分布する多重突帯を巡らせる壺。2は頸部片で4条の台形突帯が見られる。3は肩部片で、同じく4条の突帯が確認できる。同一個体とも思えるが確定はできなかった。4・5は底部付近の破片。屈曲部はどちらもシャープさに欠ける。4の外面調整はハケ目後にヘラミガキを行なうが、5はハケ目の確認できる。

甕（6～10） 6は小型の甕口縁部。端部を上方にわずかにつまみ上げる。7は比較的大型の部類。端部を面取り整形する。8は口縁部が水平近くまで開き、端部・屈曲部とともに丸みを帯びる。口径28.0cm。9は短くあまり間かない口縁部となる。屈曲部外面に三角突帯を巡らせる。10は底部片。端部はやや丸みを帯び、底面はわずかに上げ底になる。

高坏（11） 11は高坏か。内面の突出は丸みを帯びる。外端部は欠損のため不明。

器台（12） 12は器台である。器壁が薄く端部もシャープな作りである。口径11.8cm。

### 2号堅穴住居跡（図版3、第9図）

調査区中央南側に位置する円形の堅穴住居跡。1号堅穴住居跡、8号溝、7・8号土坑と重複しており、これらの中では最も古い。1号堅穴住居跡に大きく切られるため旧状を知り得ないが、ほぼ1号堅穴住居跡と同規模のものであろう。床面までの深さは約40cm、やはり壁溝を周間に巡らせる。

重複のため判然としないが、主柱穴としてP6～P9を、中央土坑としてP10を想定した。主柱穴の深さは15～30cm、1号同様8本柱となろう。P10は長軸210cm、短軸120cm、深さ30cmを測り、長方形の土坑の東側にテラス状の張り出しをもつ形となる。

出土遺物は重複や削平のためもあり、あまり多くない。

### 出土土器（第10図）

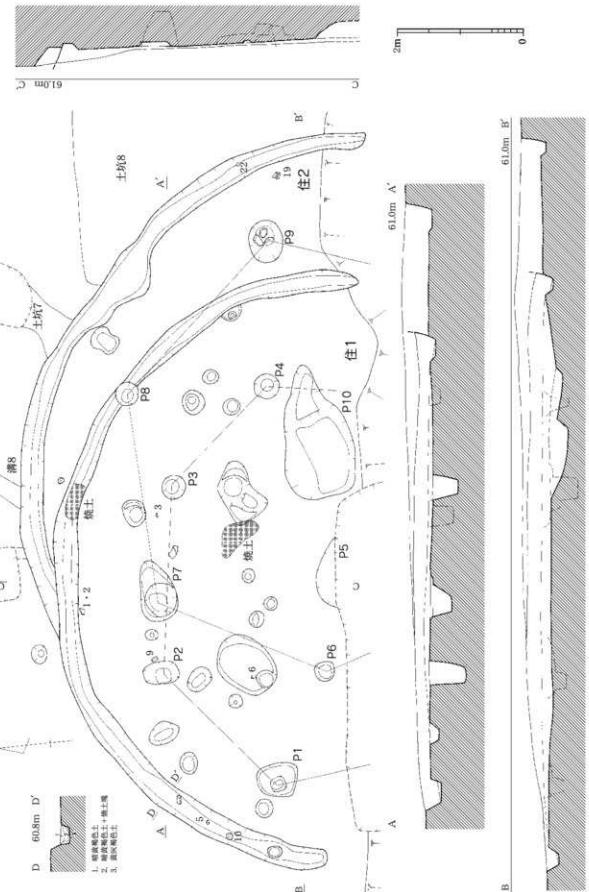
壺（13～17） 13・14は口縁部下に三角突帯を巡らせる、遠賀川以東系の長頸壺口縁部。上面に強い横ナデを加えて平坦面を形成する。14は外面丹塗り。15は頸部が筒状に短く伸びる壺の口縁部か。内面に粘土帶を貼り付け突帯状に突出させ、上面は水平面を形成する。内面にのみ丹塗りが残るが本来は外面にも塗布したのであろう。16は壺の頭屈曲部片。2条の三角突帯が認められる。17は壺底部。体部と底部の境目は不明瞭でシャープさに欠ける。

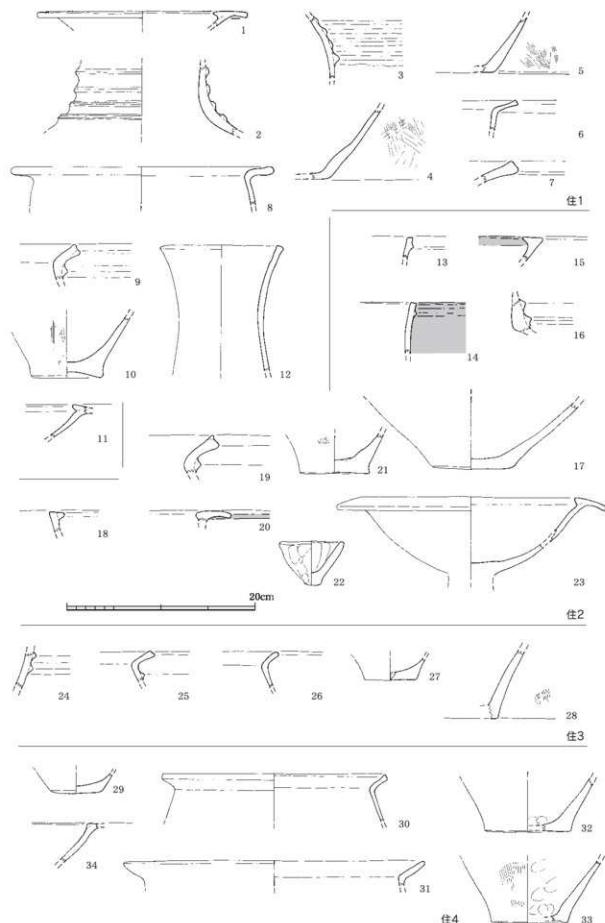
甕（18～21） 18は口縁部外端面に三角粘土帶を貼付する甕。混入品か。19は短く上外方に聞く甕口縁部。上端に粘土を貼付し、強い横ナデにより尖り気味に仕上げる。屈曲部外面には低い三角突帯を巡らせる。20はやや垂下した口縁部の甕。内面の突出は弱い。口縁部下にのみ丹塗りが残る。21は甕底部。底面はほぼ平坦で、端部はシャープな仕上げである。底径7.6cm。

鉢（22） 22は全面指整形による小型の鉢。口径6.9cm、器高4.7cm。

高坏（23） 23は鈎先口縁の高坏。外側がかなり垂下する。口径22.0cm。

第9圖 1・2号窓穴住跡剖面図 (1/60)





第10図 1~4号竪穴住居出土土器実測図 (1/4)

### 3号堅穴住居跡（図版4、第11図）

調査区中央のやや西寄りで検出した。南東側約1/3を削平により失うが、復元すると直径約9mと比較的大型の円形住居となる。4・6号堅穴住居跡と重複関係にあり、これらの中では最も新しい。床面までの深さは最も残りの良い西側で30cm。壁際には幅20~30cm、深さ10cm前後の壁溝が巡る。住居跡の南側には7号溝があるが、これは本住居跡に付属する排水施設であろう。

主柱穴はP1~P6がこれに相当すると思われるが、他は主柱穴としては浅すぎる、あるいは重複などで判断できなかった。おそらく8本柱であろう。P3・P5・P6では直径20cm前後の柱痕を確認することができた。また、P7は中央土坑であろう。長軸2m、深さ10cm程度の不整形土坑の中に長軸1m、深さ10cm程度の楕円形の土坑がある。

出土遺物はあまり多くない。図示した土器の他に第47図-5・6の石包丁が出土した。

### 出土土器（第10図）

壺（24） 24は壺胴部片。2条の三角角突帯が見られる。

壺（25~28） 25は屈曲部下に三角突帯を巡らせる壺。端部は面取り整形を行う。26は端部、屈曲部ともに丸みを帯びる。27は端部が比較的シャープな壺底部。底径5.5cm。28は外面にわずかにハケ目が認められる。

### 4号堅穴住居跡（図版4、第12図）

調査区中央からやや西寄りに位置する円形の堅穴住居跡である。直径は約9.2mを測り、大型の部類に属する。3・6号堅穴住居跡と重複しており、これらの中では最も古い。床面までの深さは最も残りの良い北側で25cm、西側は造構検出面ですべてに床面が露出していた。壁際には幅20cm~50cm、深さ10cm前後の壁溝が巡る。南側には5号溝が接続するが、これは本住居跡に付属する排水施設である。

主柱穴はP1~P4あたりが相当すると思われるが、削平や重複により判然としない。P2は直径65cm、深さ50cm、P3は直径50cm、深さ45cm。P5は円形プランの中央土坑である。直径100cm、深さ30cm。出土遺物は図示した土器の他、第47図9の石包丁が出土した。

### 出土土器（第10図）

壺（29） 29はわずかにレンズ状の丸みをもつ壺底部。底径5.2cm。

壺（30~33） 30は器壁がかなり薄い。口縁端部はわずかに上方につまり上げる。口径23.6cm。31は端部が丸く、直線的に開く。胴部上半が縮まらない点がやや異質である。口径32.1cm。32・33は端部がシャープな稜をもつ。33はわずかに上げ底となる。32は底径9.2cm、33は底径8.2cm。

高壺（34） 34は内面の突出がほとんど見られない。外側は欠損のため不明。

### 5号堅穴住居跡（図版4、第13図）

調査区のはば中央に位置する円形の堅穴住居跡で、7号堅穴住居跡と重複しており、これよりも新しい。直径5.8m、深さ20cm。壁際には幅30cm前後の壁溝が巡る。南側には8号溝が連結しており、これを通じて屋外へと排水する構造となる。

床面ではP1~P4の4つの主柱穴を確認した。これらは2m間隔でほぼ正方形に配置されており、均整のとれた平面形となる。P1は直径60cm、深さ40cmを測り、そのほぼ中央で直径20cmの柱痕を確認することができた。また穴底には4個の根固め石が確認された。

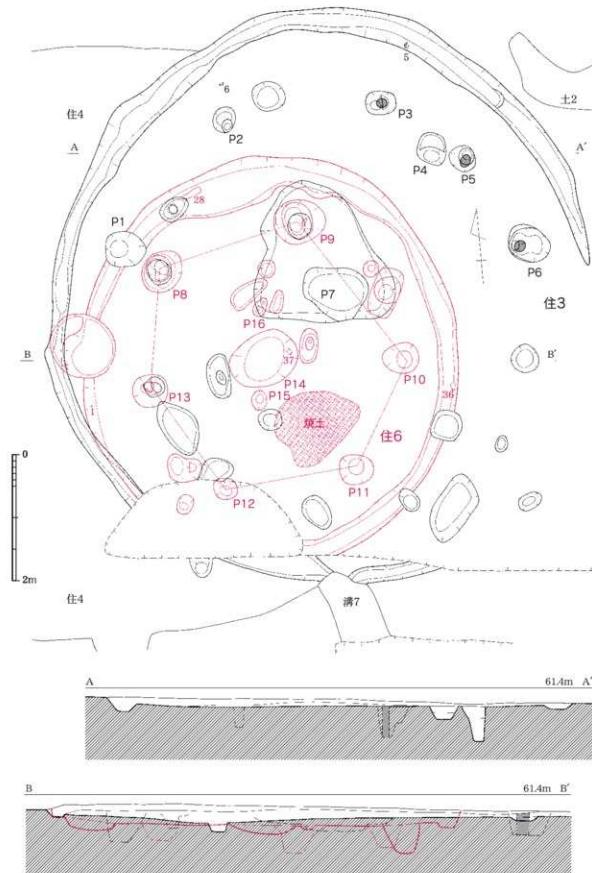
P5は中央土坑である。やや南側に寄った位置にあり、長軸200cm、短軸110cmの楕円形プランとなる。南側には径60cmのピットがあり、また北側が若干深くなる。この北側で深さ20cmを測る。

床面は部分的に貼床を行っており、下層では不整形の掘り方を確認した。

遺物は図示した土器の他に、第48図20の砥石が出土した。

### 出土土器（第14図）

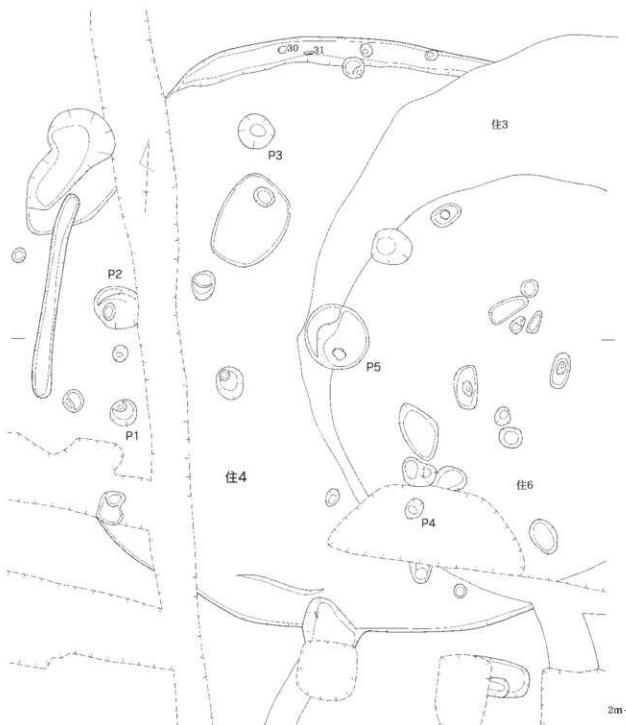
壺（1~4） 1は口縁部下に小さな三角突帯を巡らせる長頸壺。口縁部は若干開く。口径10.0



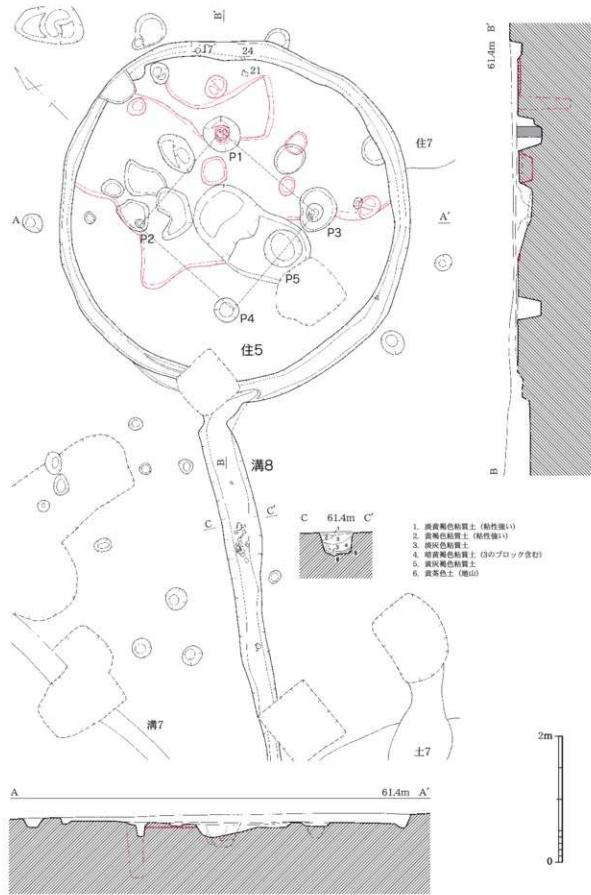
第11図 3・6号聚穴住居跡測図 (1/60)



wg19



第12図 4号竖穴住居実測図 (1/60)



第13図 5号整穴住居跡・8号溝実測図 (1/60)

cm。2は最大径の位置に1条の三角突帯を巡らせる壺胴部片。3は大きく高い三角突帯が2条認められる壺胴部片。4は外面にハケ目が見られる。底径11.2cm。

甕(5～23) 5～14は甕口縁部である。5は口縁部がわずかに内湾する。端部は四角く面をなし、上方にわずかにつまみ上げる。口径22.4cm。6は水平近くまで開く。端部は面をなし、上方にわずかにつまみ上げる。他と比べて胎土が非常によく、異質である。口径28.0cm。7は屈曲部下に三角突帯を巡らせる。口縁端部は丸みを帯び、やや肥厚する。口径44.4cm。8・9は口縁部があり開かず直線的に伸びる。9は端部が面をなす。10・11は胴部が直線的に立ち上がり、端部がシャープな面をなす口縁部となる。どちらも上端をわずかにつまみ上げる。12は屈曲部に三角突帯を巡らせる。口縁上端をつまみ上げるがシャープさに欠ける。13は外端部に沈線を巡らせる。14は屈曲部に三角突帯を巡らせ。口縁下端に粘土貼付による難ぎ目が見られる。15は甕に含めたが壺の可能性もある。肩部に断面四角形の高い突帯を巡らせる。一部に丹塗りが認められる。

16～23は甕底部片である。16は底部が若干開き、端部がシャープな作りとなる。底径7.2cm。17は底部が直線的に立ち上がるやや異質なもの。壺底部かもしれない。底径9.6cm。18は底径5.8cmとやや小型のもの。端部のつくりはシャープである。19は底面がやや上げ底となる。底径7.4cm。20もまた壺底部かもしれない。端部はシャープな作りである。21は端部があり広がらないタイプとなる。22は水平な底部となる。底径8.4cm。23は底部があり広がらず、体部もまたあまり開かず直線的に伸びる。内面には指ナデ、外面には綫ハケ目が認められる。底径7.8cm。

高坏(24) 24は深みのある坏部として図化したが、細片だったので傾きにやや不安が残る。

器台(25～27) 25は筒形器台の鈸部として図化した。外面には丹塗りが認められる。径17.2cm。26は器台の底部片か。端部の接地面は水平面を形成し、器壁がやや肥厚する。27は重心がやや上方にある器台。内面には指ナデの痕跡がわずかに見られる。

支脚(28) 28は両面指ナデ整形による支脚。径11.2cm。

## 6号堅穴住居跡（図版5、第11図）

調査区中央やや西寄りにあり、3・4号堅穴住居跡と重複する円形プランの堅穴住居跡である。3号堅穴住居跡と完全に重複しており、この住居跡の床面精査時に確認できたものである。先後関係では3号堅穴住居跡よりも古く、4号堅穴住居跡よりも新しい。直径6.4m、深さ10cm前後。壁際には幅30～60cmの壁溝がほぼ全周する。

床面ではP8～P13の6つの主柱穴を確認した。これらは190～280cm間隔でややいびつな配置となる。柱穴の規模は直径60～80cm、深さ50cm前後。P14は中央土坑である。直径100cm、深さ25cm。中央土坑の両側にはP15・P16があり、棟持柱穴の可能性もあるが、P15は深さ20cm、P16は深さ15cmと浅く、確定するまでには至らなかった。また、中央から南東寄りの位置で焼土面を検出した。

### 出土土器（第14図）

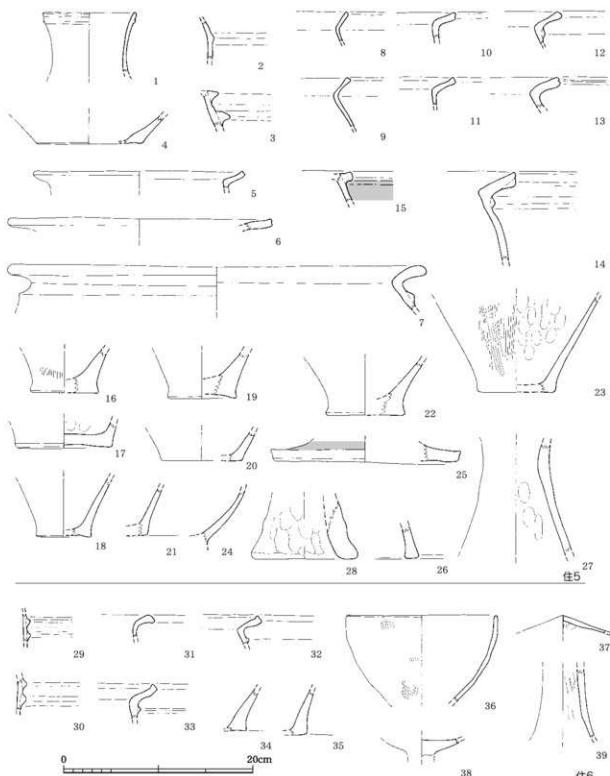
壺(29・30) 29・30は胴部最大径の位置に稜の不明瞭な突帯を持つ壺胴部片。現状では2条認められる。

甕(31～35) 31は短く外反する甕口縁部。端部が肥厚したような形状となる。32は上端部に粘土帶を貼付して明瞭な跳ね上げ口縁となる。屈曲部からやや下がった所に低い三角突帯を巡らせる。33も32と近い形状だが、口縁部がわずかに内湾している。34・35は端部がシャープな稜をなす甕底部。裾部の開きはほとんどない。

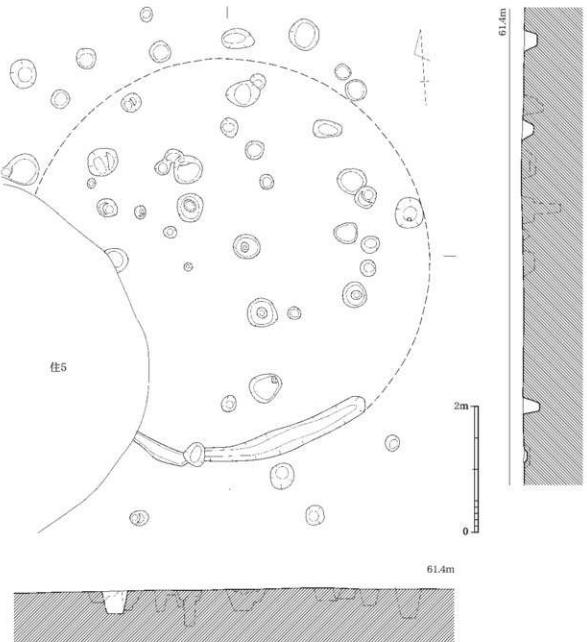
鉢(36) 36は深みのある鉢。口縁部は直立し端部を丸くおさめる。外面にわずかにハケ目が認められる。口径16.0cm。

蓋(37) 37は小型の笠形蓋である。おそらく無頸壺の蓋であろう。器表面の風化が進んでおり調整は不明。

高坏(38) 38は高坏の坏脚接合部片。器表面の風化が進んでおり調整は不明。39は脚柱部。内面にはシボリの痕跡が認められるが外側の調整は不明。他と比べて胎土が非常に良い。



第14図 5・6号竖穴住跡出土土器実測図（1/4）



第15図 7号堅穴住居跡実測図（1/60）

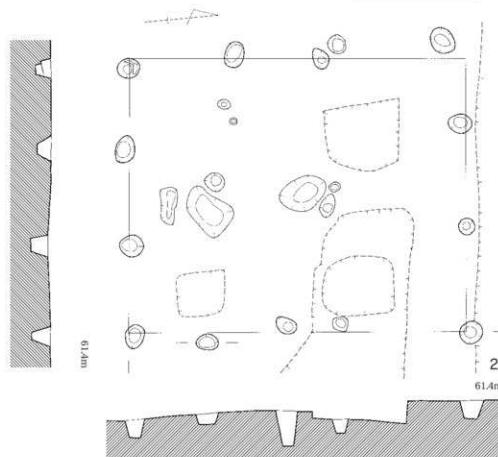
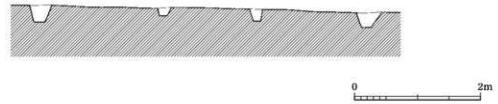
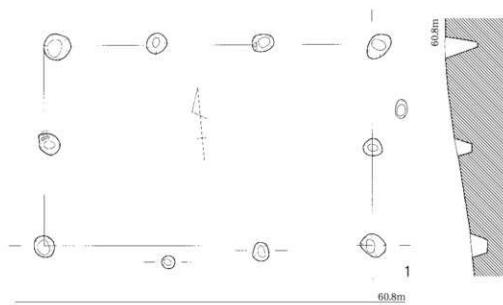
#### 7号堅穴住居跡（第15図）

調査区のほぼ中央で検出した堅穴住居跡である。5号堅穴住居跡と重複しており、これよりも古い。削平が著しく、南側の壁溝の確認によって堅穴住居跡の存在をようやく判断できた次第である。復元すると6.4m程度の規模となる。主柱穴や中央土坑なども判断できなかった。図示できる遺物も出土していない。

#### 掘立柱建物跡

##### 1号掘立柱建物跡（図版5、第16図）

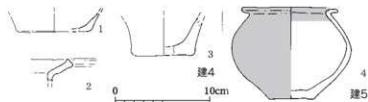
調査区西南端で検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸方位をほぼ東西にとり、桁長530cm、梁長320cm、柱間は175～200cmを測る。柱穴は直径20～40cm、深さ20～60cm。図示できる遺物はないが、古代の須恵器片が出土している。



第16図 1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

## 2号掘立柱建物跡（第16図）

調査区西端で検出した掘立柱建物跡である。3間×3間を基本とするが、東側は変則的に4間となる。主軸方位を南北にとり、桁長540cm、梁長430cm、柱間は140～230cmとかなりばらつきがある配置となる。柱穴は径20～50cm、深さ20～50cm。時期を判断できる出土遺物に恵まれなかつたが、主軸方位や規模などから1号掘立柱建物跡と同時期のものと思われる。



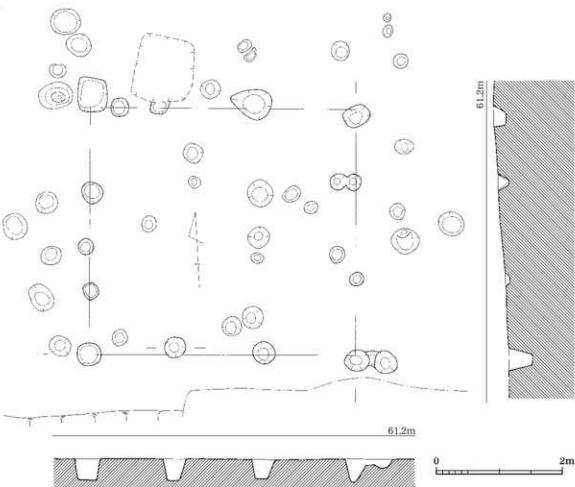
第17図 掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）

## 3号掘立柱建物跡（第18図）

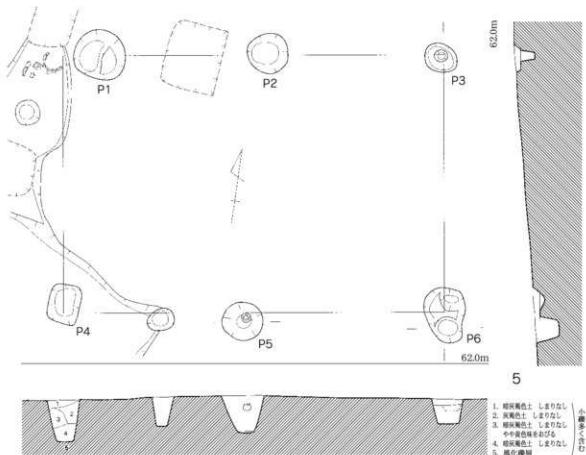
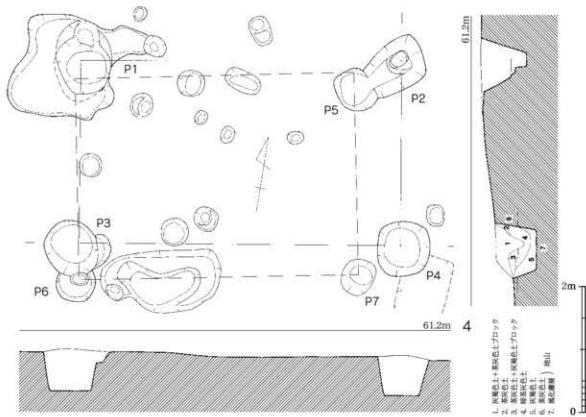
調査区の中央南側で検出した3間×3間の掘立柱建物跡である。主軸をほぼ東西にとり、桁長420cm、梁長400cm、柱間は120～160cmを測る。柱穴は直径20～60cm、深さ10～40cm。出土遺物は弥生土器片ばかりだが、主軸方位や建物規模は1・2号掘立柱建物跡と類似するので古代の建物跡と考えてよいだろう。

## 4号掘立柱建物跡（図版6、第19図）

調査区中央東寄りで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸を東西にとり、桁長510cm、梁長290cmを測る。柱穴はP3で直径90cm、深さ65cmを測る。P2～P4の南西側にはそれぞれP5～P7があり、少なくとも1回の建て替えが行われたことがわかる。



第18図 3号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第19図 4・5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

#### 出土土器（第17図）

壺（1） 1は壺底部片。器表の風化が著しく調整不明。底径8.0cm。

甕（2・3） 2は跳ね上げ口縁となる甕口縁部。外面の炭化物付着が著しい。3は甕の底部。底径7.0cm前後。

#### 5号掘立柱建物跡（図版6、第19図）

調査区の南東側、4号掘立柱建物跡の東隣にほぼ軸をそろえて配置される、1間×2間の掘立柱建物跡である。桁長610cm、梁長410cmを測る。柱穴はP1で直径80cm、深さ40cm、P5で直径60cm、深さ60cmを測る。P3では直径約20cmの柱痕を確認した。また、P5からは完形に近い無頸壺が出土した。

#### 出土土器（図版14、第17図）

壺（4） 4は完形に復元できる壺である。底部はわずかに上げ底となり、胴部は球状に近く最大径が中央よりやや上位にある。頸部はあまり縮まらず口縁部は短く水平に開く。口縁部欠損のため穿孔は不明。外面の全面と内面の口縁部付近に丹塗りが認められる。胎土は他の土器と比べて若干良い。口径10.2cm、底径4.7cm、器高9.7cm。

#### 土坑

##### 1号土坑（図版7、第20図）

調査区の南西で検出した長方形の土坑である。主軸を北西-南東にとり、長軸210cm、短軸130cm、内部はテラスを有して深くなっている、テラス面までの深さは15-20cm、坑底までの深さは55cm。

##### 出土土器（第21図）

壺（1） 1は無頸壺の下半部。丸く球形に近い胴部となるようである。外面丹塗り。底径6.4cm。

##### 2号土坑（図版7、第20図）

調査区中央西寄りで検出した不整形の土坑である。長軸225cm、短軸90cm、深さは南東のテラス部で10cm、中央付近で20cm。

##### 出土土器（第21図）

甕（2-5） 2は屈折口縁の甕。端部は面取り整形し跳ね上げは認められない。胴部上半は直立立ち上がる。口径25.6cm。3は跳ね上げ口縁となるが外端部は丸みを帯びる。屈曲部下に三角突起を巡らせる。口径30.0cm。4は短いL字状口縁となる甕端部。口縁部外側に横ナデを行い断面四角形に仕上げる。5は水平に伸びる動先口縁部。他の器種の可能性もある。丹塗りを行う。

高坏（6・7） 6・7は動先口縁の高坏。6は口縁部が水平に伸びる。内外面丹塗り。口径27.4cm。7は口縁部がわずかに垂下する。外端部は強い横ナデにより沈継状に仕上げる。口径27.0cm。

##### 3号土坑（図版7、第20図）

調査区中央西より、2号土坑の南東で検出した不整長方形の土坑である。長軸170cm、短軸115cm、内部は緩やかに傾斜しており、中央付近の最深部で深さ20cm。

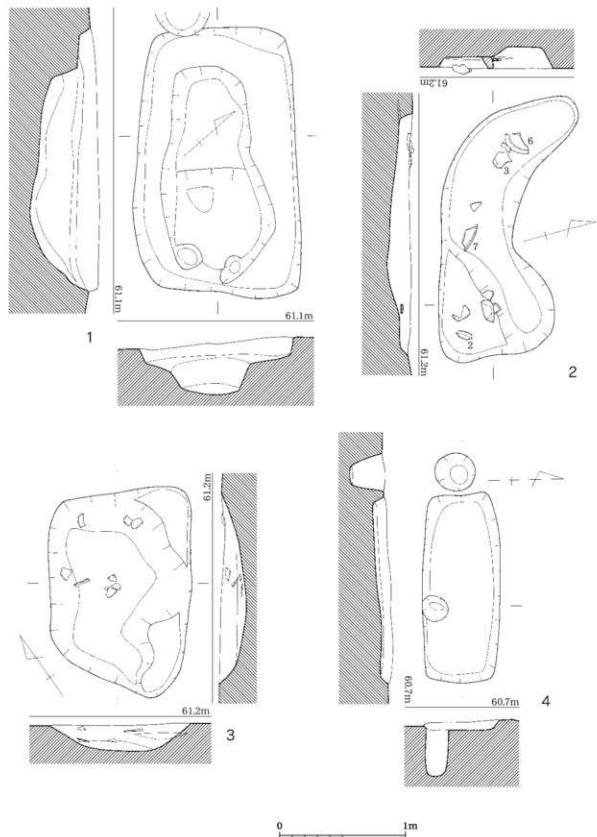
##### 出土土器（第21図）

壺（8・9） 8・9は動先口縁の壺。8は頭部があまり開かず口縁部内面の突出が大きい。口径20.0cm。9は大きく開く口縁部となる広口壺。端部は水平に伸びる。口径28.0cm。

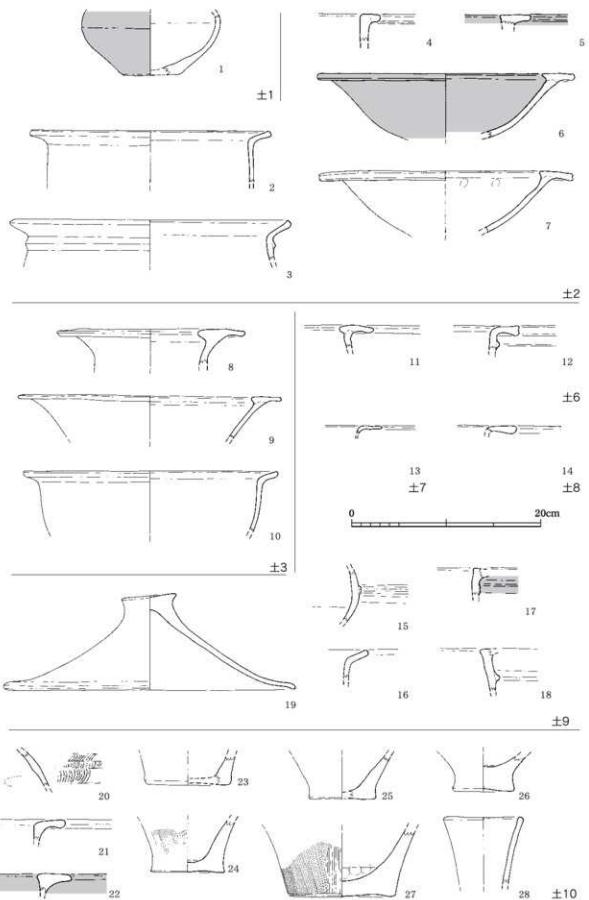
甕（10） 10は屈折口縁の甕。胴部上半は縦まらず垂直に立ち上がる。口径27.0cm。

##### 4号土坑（図版8、第20図）

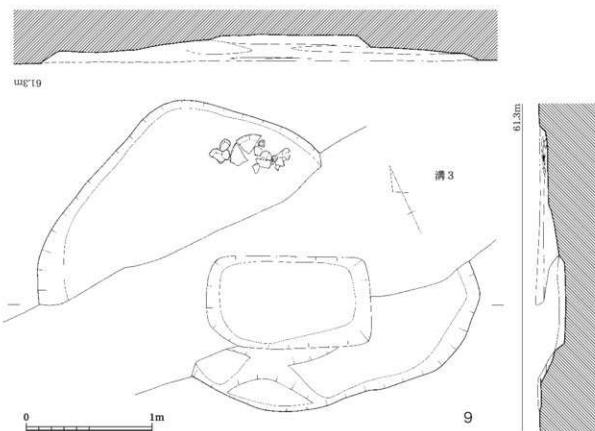
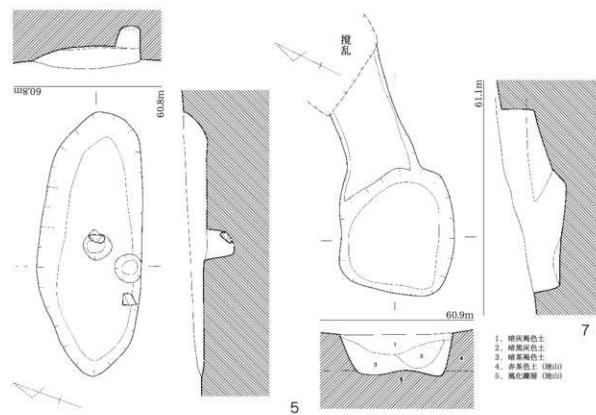
調査区南西で検出した長方形の土坑である。長軸150cm、短軸60cm、深さ10cm。南壁際には直径20cm、深さ35cmのピットがある。出土遺物は非常に少なく、図示できるものはない。



第20図 1~4号土坑実測図 (1/30)



第21図 1～10号土坑出土器実測図 (1/4)



第22圖 5・7・9号土坑実測図 (1 / 30)

### 5号土坑（図版8、第22図）

調査区南西側で検出した楕円形の土坑である。長軸210cm、短軸83cm、深さ20cm。中央付近に二つのピットがある。出土遺物は少なく図示できるものはない。

### 6号土坑（第23図）

調査区中央付近、7号堅穴住居跡の北側で検出した土坑である。菱形に近い形状で、長軸170cm、短軸90cm。底面はほぼ平坦で深さ5cm。遺物は少ない。

### 出土土器（第21図）

甕（11・12） 11は鋤先口縁の甕口縁部片。形状から丹塗り土器の可能性もあるが器表の風化が著しく不明。12は屈折口縁の甕。端部はわずかに跳ね上げる。屈折部下に三角突帯を巡らせる。

### 7号土坑（図版8、第22図）

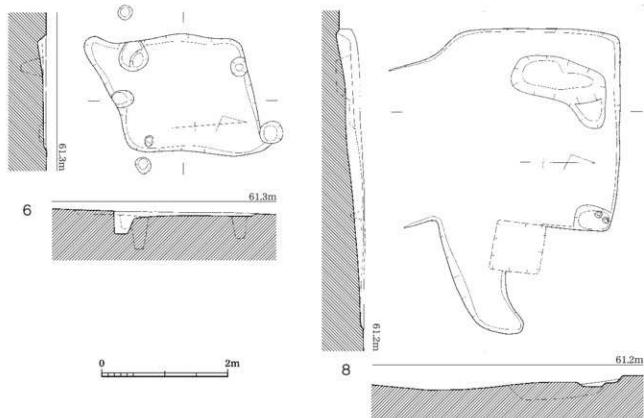
調査区の中央付近で検出した土坑である。2号堅穴住居跡と重複しており、これよりも新しい。方形の掘り込みの北東側に幅の広い溝状部が接続した形状となる。方形掘り込みは一辺90cm程度、深さ40cm、全長195cm、溝状部分の深さは30cm。

### 出土土器（第21図）

甕（13） 器壁が薄い小型品。水平に伸びる口縁部となる。

### 8号土坑（図版9、第23図）

調査区中央南寄りで検出した土坑である。2号堅穴住居跡と重複しておりこれよりも新しい。北面部が方形プランを呈しており南壁は削平のため遺存していない。東西長155cm、南北長190cm、深さ15cm。覆土は黒褐色土で他の弥生時代土坑と異なる。掘削前は奈良時代頃の堅穴住居跡を想定していたが、カマドや主柱穴などは無く堅穴住居跡と断定するには至らなかった。遺物は非常に少なく、



第23図 6・8号土坑実測図 (1/60)

また出土土器は弥生時代のもののみである。

#### 出土土器（第21図）

甕（14） ほぼ水平に開き、端部を肥厚させ丸くおさめる。

#### 9号土坑（図版9、第22図）

調査区中央付近で検出した土坑である。3号溝と重複しており、これよりも古い。3号溝に中央を大きく削平されるが、長軸350cm、短軸210cmの橢円形に近い形状に復元できる。さらに土坑のほぼ中央には長軸130cm、短軸75cmの長方形の土坑がある。遺構面から長方形土坑底までの深さは45cm。

#### 出土土器（図版14、第21図）

壺（15） 15は胴部の最大径にあたる位置にM字状突帯を巡らせる。突帯は後が丸くシャープさに欠ける。

甕（16～18） 16は折曲口縁の甕。端部は面を形成する。17はL字状口縁で内面の突出は見られない。口縁部直下に低い台形突帯を巡らせる特異な形状となる。18は胴部上半が内傾する器形となる。口縁部下に丸みを帯びた三角突帯を巡らせる。

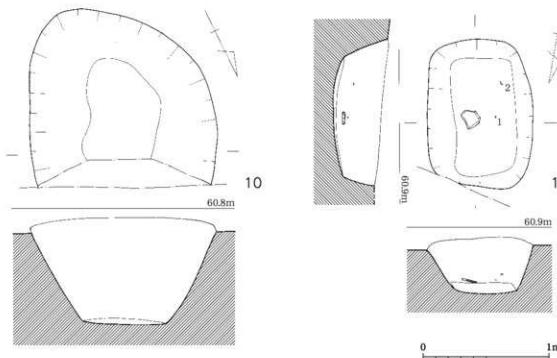
蓋（19） 19は甕蓋である。同時期の甕底部と同様、端部がシャープな稜をなし厚みのあまりない天井部となる。鋸端部は丸く仕上げられる。器表の風化が著しく調整不明。器高10.2cm、鋸部径31.0cm。

#### 10号土坑（図版9、第24図）

調査区北端で検出した土坑である。北側が調査区外へと続いており、現状では直径150cm前後の円形プランに近い形状となる。壁面は直線的に傾斜し坑底はほぼ水平になる。深さは85cm。遺物は図示した土器の他、第49図25の砥石が出土した。

#### 出土土器（第21図）

壺（20） 20は前期の壺胴部片で混入品である。外面にヘラ状工具による有軸羽状文が認められる。



第24図 10・11号土坑実測図（1/30）

また外面には化粧土を塗布している。

甕（21～27） 21・22は甕の口縁部である。21は屈折口縁部片。端部はわずかに肥厚し丸味を帯びる。22はあまり発達しない鶴先口縁部片。内側の突出はほとんど無く、外側へは水平に伸びる。23～27は甕底部片。23は裾部の開きがなく底部から直線的に立ち上がる。底径9.2cm。24～26は裾部が若干開き、端部がシャープな稜をなす。24にはハケ目が認められるが25・26は風化のため器表が剥離する。26はわずかに上げ底となる。24は底径7.8cm、25は底径7.2cm、26は底径6.6cm。27はやや大型となる。端部は明瞭な稜をなし、裾部は開かず裾端部から直線的に体部へと開く。外面には縦ハケ目が認められる。底径11.1cm。

器台（28） 28は器台である。端部は面をなす。口径8.6cm。

#### 11号土坑（図版10、第24図）

調査区北東端で検出した土坑である。形の整った長方形を呈し、長軸115cm、短軸85cm、深さは40cmを測る。覆土中からは図示した土器の他に第50図の玉類が見つかっており、土坑墓である可能性が高い。第50図1は底面から15cmほど浮いて寄りの位置で、第50図2は10cmほど浮いた状態で中央付近から出土した。

#### 出土土器（第25図）

壺（1） 1は壺の底部片。底径8.2cm。

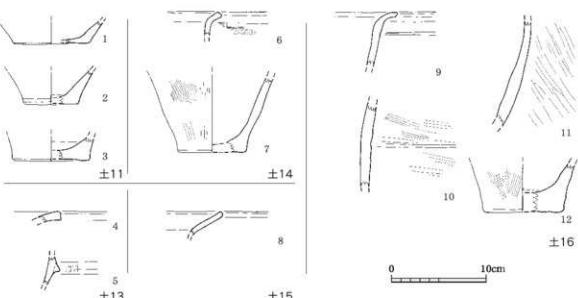
甕（2・3） 2・3は甕の底部片。2は裾部の開きがなく、わずかに外反しながら体部へと伸びる。底径6.0cm。3はあるいは甕底部かもしれない。やはり裾部が開かず直線的に体部へと移行する。底径8.2cm。

#### 12号土坑（図版10、第26図）

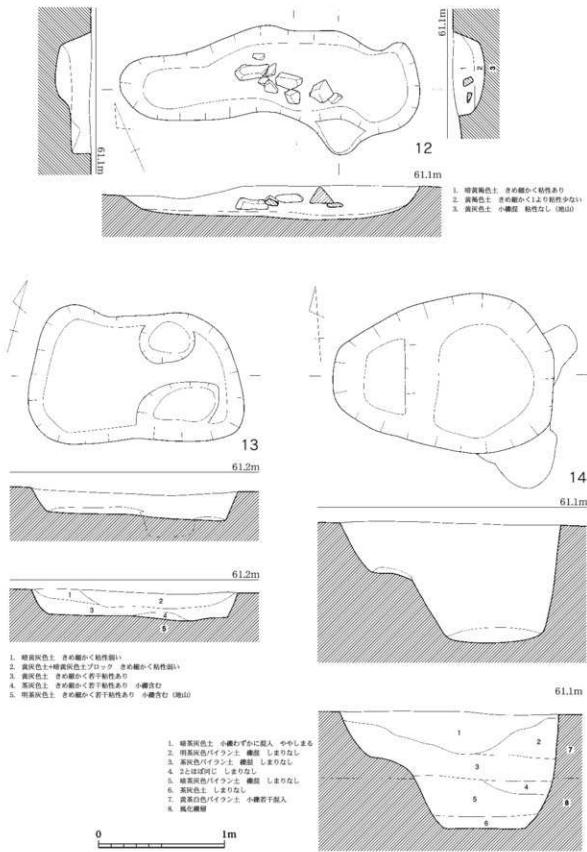
調査区東側で検出した、東西に長く伸びる土坑である。長軸240cm、短軸70cm、深さ25cm。中央からは底面からやや浮いた状態で数個の砾が出土した。出土遺物は非常に少なく、図示できるものはない。

#### 13号土坑（図版10、第26図）

調査区中央付近で検出した長方形の土坑である。長軸170cm、短軸110cm、深さ20cm。底面はほぼ平坦だが、東側に2か所ピットが見られる。出土遺物は少ない。



第25図 11～16号土坑出土土器実測図（1/4）



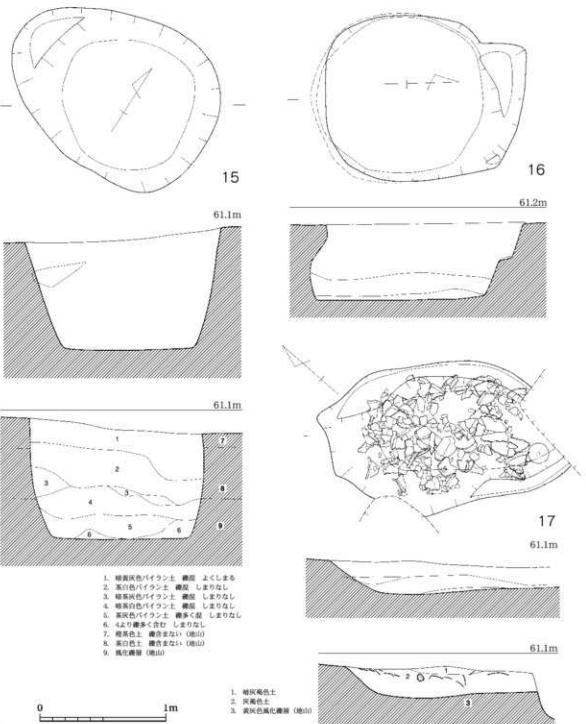
第26図 12～14号土坑実測図(1/30)

### 出土土器（第25図）

甕（4・5） 4は甕の口縁部片。おそらく屈折口縁であろう。端部は横ナブによる面を形成する。5は甕又は甕の胸部分片。三角突部を貼付しており、剥離面には先行するハケ目が認められる。

### 14号土坑（図版11、第26図）

調査区東側で検出した楕円形の土坑である。長軸175cm、短軸130cm。西側にテラスがあり、テラス部で深さ40cm、東側の最深部で深さ95cm。土坑の形状から貯蔵穴として使用されたものであろう。



第27図 15～17号土坑実測図（1/30）

#### 出土土器（第25図）

壺（6・7） 6は如意形口縁部片。端部は横ナデにより面を形成する。7は壺底部片。底部から直線的に体部へと続く。内面はナデ、外面は継ハケ目。底径7.2cm。

#### 15号土坑（図版11、第27図）

調査区東側で検出した楕円形プランの土坑である。長軸170cm、短軸130cm。西側にテラスがあり、テラス部で深さ20cm、土坑底面はほぼ水平に掘削されており、深さは90cm。14号土坑同様貯蔵穴として使用されたものであろう。

#### 出土土器（第25図）

壺（8） 8は細片であり器形に不安が残るが、おそらく壺の口縁部であろう。直線的に開き端部は丸みを帯びる。

#### 16号土坑（図版11、第27図）

調査区東側で検出した土坑である。北側が壁の崩落により不整形となるが、比較的形の整った円形プランとなる。長軸155cm、短軸130cm。南側はオーバーハンギングしており袋状をなす。底面はほぼ水平に掘削されており、深さ60cm。14・15号土坑同様、貯蔵穴として使用されたものである。遺物は図示した土器の他に第49図27の砥石が出土した。

#### 出土土器（第25図）

壺（9～12） 9は如意形口縁となる壺の口縁部。口縁部下には一条の沈線を巡らせる。器表風化のため調整不明。10は一条沈線を巡らす壺胴部片。内面はナデ、外面はヘラミガキ調整を行う。11は壺下半部片。内面はナデ、外面はやはりヘラミガキ調整。12は壺底部片。底部は厚みがあるが柱状にはならない。内面ナデ、外面ハケ目。底径5.2cm。

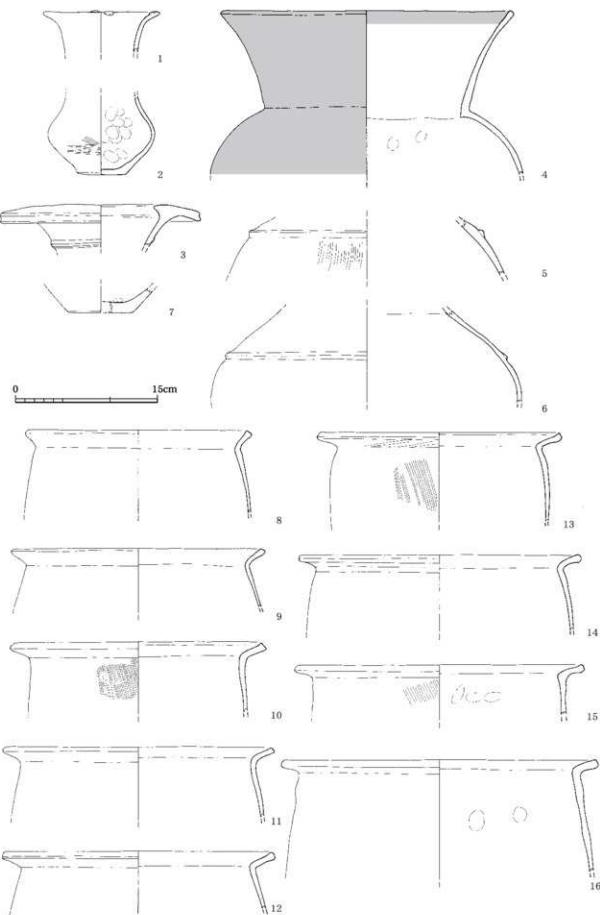
#### 17号土坑（図版12、第27図）

調査区東側で検出した土坑である。擾乱により南側を失うが、長軸200cm、短軸100cm程度の楕円形プランが想定される。壁は緩傾斜で坑底へと続いており、底面は西側がわずかに深くなる。この西側で深さ20cm。遺構確認時にすでに多量の土器が露出していたが、精査の結果ほぼ全面にわたって破砕した土器の広がりが確認できた。これらの土器は底面から浮いた状態で出土しており、埋没途中で廻棄されたものと思われる。

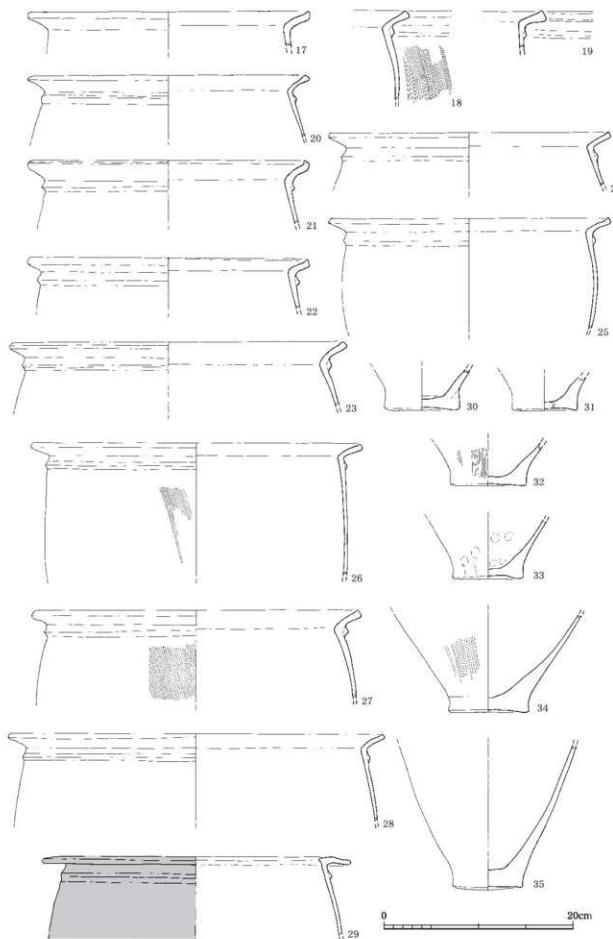
#### 出土土器（図版14、第28～30図）

壺（1～7） 1・2は接合しないが同一個体となる長頸壺。胴部は最大径がやや下位にあり、頭部の縮まりは弱い。口縁部は外反しながら開き端部はさらに外反する。口縁部の内面には円形浮文を貼付するが、欠損のため配置等は不明。胴部下半はハケ目、それ以外はナデ調整。口径12.6cm、底径5.0cm。3は鶴先口縁壺。頭部は細く、頭部の器壁に対して口縁部がかなり厚い。口縁部の内側は三角状に突出し、外側はやや垂下する。頭部には一条の台形突帯が見られる。口径21.2cm。4は素口縁の広口壺。肩部は丸く頭部はあまり縮まらない。口縁部の開きは弱く、端部は四角くおさめる。外面全面と内面の口縁端部付近に丹塗りが認められる。口径30.4cm。5・6は壺の肩部である。5は肩部に一条の三角突帯を巡らせる。突帯下にはハケ目が認められる。6は肩部に台形突帯が一条巡る。7は壺底部片。底径7.0cm。

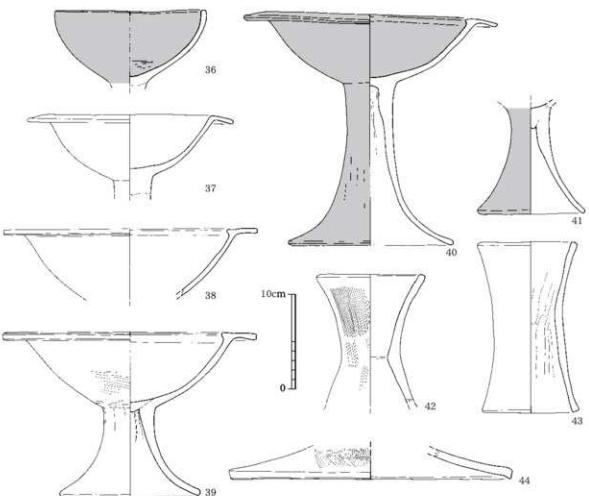
壺（8～35） 8～29は壺口縁部片。29以外はすべて屈折口縁である。8～17は口縁部下に三角突帯をもたないもの。10・13は明瞭な跳ね上げ口縁となる。14以外は端部が丸く、それ以外は横ナデにより明瞭な面を作る。13・14は胴部上半が丸みを帯びて内傾する。9は器壁がかなり薄い。最も口径の小さい8は口径24.0cm、最も大きな16は口径31.0cm。18～28は口縁部下に三角突帯を巡らせるもの。18・23・27は屈曲部に三角突帯を巡らせ、それ以外は屈曲部よりやや下に巡らせる。端部は明瞭な跳ね上げ口縁となるものが多い。口径は最も小さい20が30.0cm、最も大



第28図 17号土坑出土土器実測図① (1/4)



第29圖 17號土坑出土土器實測圖② (1 / 4)



第30図 17号土坑出土土器実測図③（1/4）

きな 28 が 40.0 cm。29 は鋤先口縁の甕。口縁部の外側は若干垂下する。外面の口縁部下に低い台形突帯が 1 条巡る。器壁は全体的に薄い。胎土は他のものと変わらない。口径 32.8 cm。

30～35 は底部片である。33・34 は裾部がわずかに広がり、それ以外はほとんど広がらず直線的に立ち上がる。底面はいずれもわずかに上げ底となる。端部はしっかりとした後をもつ。35 は他と比べてやや厚い底部となる。底径は最も小さい 31 が 7.0 cm、最も大きな 34 が 8.5 cm。

高坏（36～41）36 は素口縁の坏部。深みがあり口縁部は直立する。端部は丸い。外面に丹塗りを行うが、肉眼観察では内面と外面の丹の色調が異なり、外面はあるいは化粧土かもしれない。器表の風化が著しいが内面にはわずかにヘラミガキが認められる。胎土に粗砂粒を多く含みあまり良くない。口径 16.0 cm。37 は内面の突出がない屈折口縁のもの。口縁端部は若干垂下する。胎土に砂粒をあまり含まず精良。口径 21.6 cm。38～40 は鋤先口縁となる。38・39 は口縁部がほぼ水平に伸び、内側に三角形状に突出する。外端部は四角く面取りする。38 は丹塗りの可能性もあるが器表が完全に剥落しており確認できない。39 は脚柱部が短い高坏。裾部は丸くおさめる。柱部内側に接合時の粘土充填痕跡が認められる。坏部外面にヘラミガキが認められる。胎土はそれほど精良ではない。口径 26.9 cm、器高 17.4 cm、裾部径 14.9 cm。40 は脚柱部の長い高坏。口縁部はやや垂下し、端部は内外面とも丸い。裾の端部も丸くおさめる。坏部は外面に、裾部は外面に丹塗りを行う。口径 27.0 cm、器高 24.9 cm、裾部径 17.6 cm。41 は脚柱部。裾部の開きは他の 2 点と比べて弱い。柱部内面には接合時の粘土充填痕跡が認められる。外面丹塗り、内面にもわずかに丹が確認できるが器表剥離が著しく発布したかどうかわからない。裾部径 11.4 cm。

器台（42・43）42 は中央のくびれが強く、内面に稜をもつ器台。端部は丸みを帯びる。内面はナデ、外面は継ハケ目調整。口径 11.6 cm。43 は 42 と比べて中央部のくびれが少ない。上側、下側とも

ほぼ同じような開き具合である。内面には指ナデ調整が認められるが外面は器表の風化のため不明。

口径 10.7 cm、器高 18.0 cm。

蓋（44） 44は甕蓋の裾部片。器高が低く扁平な蓋となるようである。端部は跳ね上げ口縁のよう下方に鋭い棱をもつてつまみ出す。内面ナデ、外面ハケ目調整。裾部径 30.0 cm。

## 溝

### 1号溝（図版 12、第 31 図）

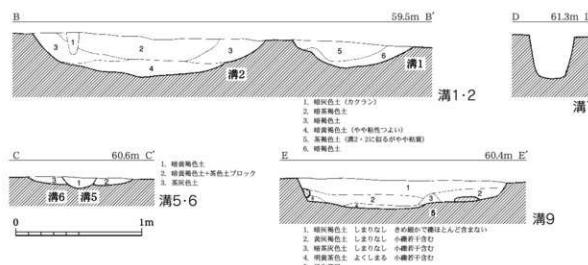
調査区北西で検出し東西に直線的に伸びる溝である。後述する 2・3 号溝と併走する。長さ 15 m、幅 95 cm、深さ 20 cm。底面は棱をなさずに壁面へと続き、壁面は緩やかに立ち上がる。

### 出土土器（第 32 図）

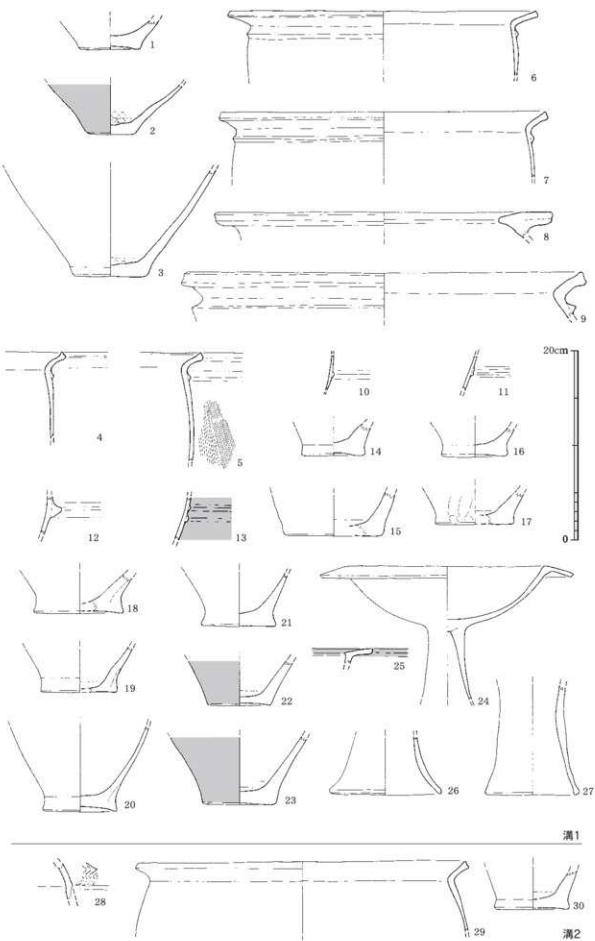
壺（1～3） 1～3 は壺の底部。1 は若干上げ底となる。底径 6.5 cm。2 は外面丹塗り。底径 5.0 cm。3 はあるいは甕かもしれない。底径 8.0 cm。

甕（4～23） 4～9 は甕の口縁部。4・5 は明瞭な跳ね上げ口縁で、口縁部下に低い三角突帯を巡らせる。4 は胎土が他の若干異なり異質である。6・7 は跳ね上げがあまり明瞭ではない。やはり口縁部下に三角突帯を巡らせる。6 は口径 33.0 cm、7 は口径 35.0 cm。8 は厚い鈍先口縁となるもの。口縁が縮まとった器形となる。口径 36.0 cm。9 はやや大型となる屈折口縁の甕。端部は跳ね上げ口縁となる。屈曲部のやや下に三角突帯を巡らせる。口径 43.0 cm。10～13 は胴部片で、壺となるものがあるかも知れない。10 は小さな三角突帯、11 は低い M 字突帯、12 は大きな三角突帯、13 は 2 条の低い台形突帯を巡らせる。13 には外面丹塗りを行う。14～23 は底部片。14 はわずかに上げ底となる。底径 6.8 cm。15 は底部の開きがなく端部から直線的に体部へと移行する。胎土には粗砂が目立つ。底径 10.5 cm。16 は底面がわずかに上げ底となる。二次被熱のため器表が赤変する。底径 7.0 cm。17 は外面に指ナデの稜線が見られる。底径 8.4 cm。18 は裾が広がりシャープな稜を作る。底面はわずかに上げ底となる。底径 9.6 cm。19 は底部の器壁が薄い。端部はシャープだが裾はほとんど広がらない。底径 8.2 cm。20・21 も端部がシャープな稜をなす。20 は若干上げ底、21 は平坦な底面となる。20 は底径 7.8 cm、21 は 8.0 cm。22・23 は丹塗り土器。どちらも裾の開きが見られない。22 は底径 6.8 cm、23 は底径 7.8 cm。

高坏（24・25） 24 は口縁部が垂下する高坏の坏部。内側への突出は見られず、外端部は面をなす。口径 27.0 cm。25 は小片の丹塗り土器で器種が不明瞭だが高坏に含めた。口縁部はほぼ水平に伸びており、内側にもわずかに突出する。



第 31 図 1・2・5～7・9 号溝断面図（1/30）



第32図 1・2号溝出土土器実測図 (1/4)

器台（26・27）26は端部を丸くおさめる。裾部径12.0cm。27は端部が面をもち、中央部の縮まりの弱い器形となる。裾部径10.0cm。

## 2号溝（図版12、第31図）

調査区の北西、1号溝と3号溝に挟まれた位置にある溝で、1・3号溝とは併走する。直線的だが東端部がわずかに北方向に振れる。長さ17m、幅185cm、深さ35cm。底面は明瞭な稜をなさず壁面は継やかな立ち上がりとなる。

出土土器（第32図）

壺（28）28は無軸羽状文を巡らせる壺肩部片。混入品。

甕（29・30）29はわずかに跳ね上げ口縁となる甕。口縁端部の稜は鋭い。口径35.4cm。30は底部片。裾部は若干開き、端部は丸みを帯びる。底径8.0cm。

## 3号溝（図版12・13、第33・34図）

調査区の北側にあり、直線的に東西へと延びる溝である。全長54m、幅は西側で2m、深さ80cm前後、東側は削平を受けており途切れる所もある。また、調査区のほぼ中央、ちょうど堅穴住居跡群が創れた位置には当初から溝の掘削を行っていないらしく、約3mの幅で陸橋部となる。遺物は西半部から特に集中して出土しており、一時期に廃棄された状況が窺える。溝底から30cm程度浮いた状態であり、埋没途中で廃棄されたものであろう。遺物は図示した土器の他、第47図11の石包丁未製品、第48図16・17の磨製石斧、第48図23、第49図29・30の台石が出土した。

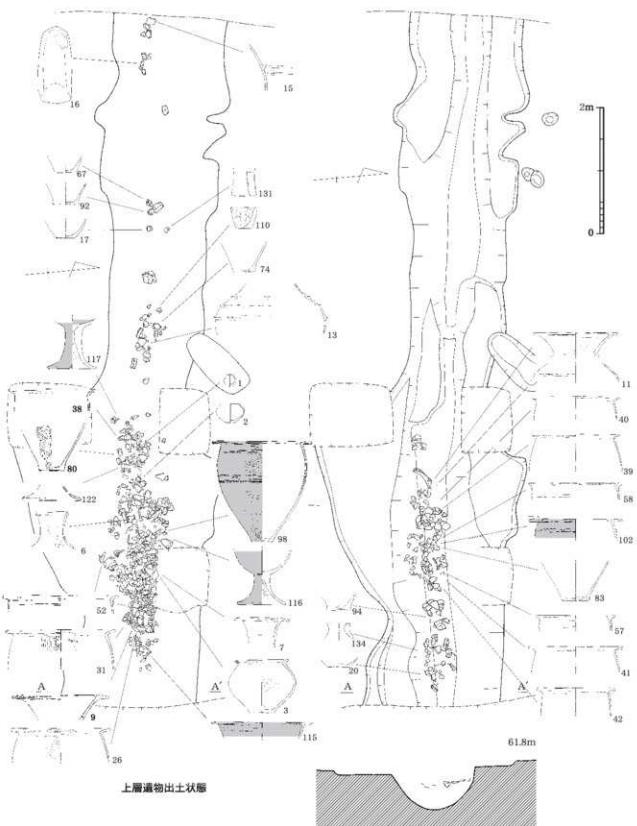
出土土器（図版14・15、第35～41図）

壺（1～23）1はミニチュア無頸壺。調整は全面指整形による。口径2.3～2.5cm、器高3.8cm。2は小型の無頸壺。外面丹塗り。口径6.3cm、器高6.0cm。3は無頸壺である。最大径は中央よりやや上位にあり、口縁部は強く外反する。口縁部欠損のため穿孔の有無は不明。他と比べて胎土が精良である。口径17.2cm、器高17.1cm。4・5は無頸の土器。壺に含めたが頸例からすると胴の長い器形となるらしく、甕としたほうが妥当かもしれない。口縁部は強く内傾して締まった形状となる。口縁部のやや下には鈎状の長い突帯がある。口縁部・鈎部とともにナデにより面を形成する。双方とも丹塗り。4は口径17.6cm、5は外面にかすかにヘラミガキが認められる。口径21.6cm。6は長頸壺である。頸部から口縁部にかけてわざかに開き、口縁部直下に三角突帯を1条巡らせる。外面に縦ヘラミガキ、内面には指ナデが見られる。外面と内面の口縁部に丹塗りを行う。口径10.4cm。

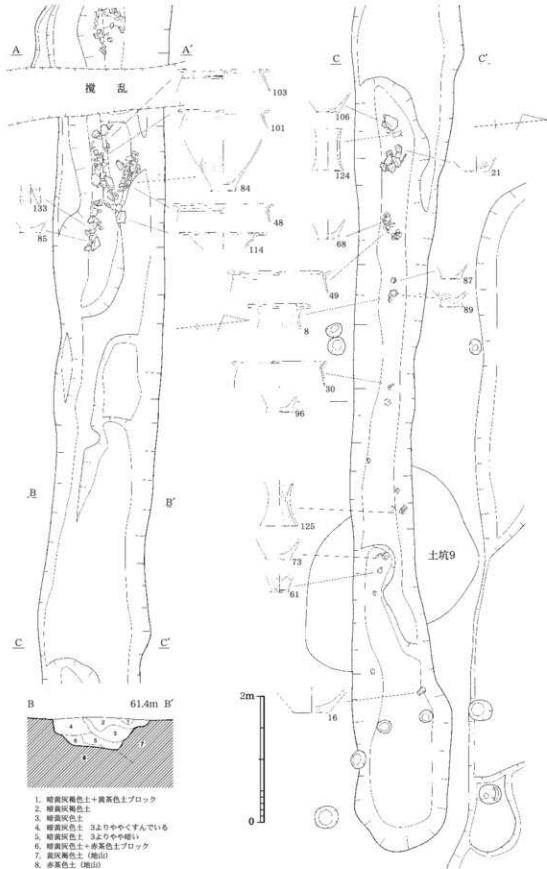
7・8は頸が細長く締まった鈎先口縁の壺。7は外面に2条の突帯が見られる。口縁部は外側に若干垂下し、内面にも突出が見られる。口径18.9cm。8は頸部から口縁部にかけて開かず直立し、口縁部は分厚くほぼ水平に伸びる。口径20.0cm。9～11は鈎先口縁の広口壺。9は鈎先口縁だが内面の突出は見られない。外側に向けて若干垂下し端部は丸くおさめる。口径31.0cm。10は水平に伸びた鈎先口縁の上面に円形浮文を貼付する壺。欠損のため浮文の数などは不明。口径29.9cm。11は接合しないが同一個体。肩部には台形に近いM字突帯を巡らせる。頸部付け根は比較的締まつておらず頸部は若干外反しながら開く。口縁部は水平に伸び、内側にも突出する。口径26.6cm。12は端部を跳ね上げる素口縁の広口壺。頸部の付け根はやはり締まるようである。口径34.0cm。

13～15は胴部片。13は肩部に3条の三角突帯を巡らせる。頸部が締まった器形となるようである。14もやはり胴部最大径の位置に三角突帯を巡らせるもの。15は2条の突帯が見られるが突帯の頂部がやや平坦になり台形に近い形状となる。16～23は底部片。いずれも器表の風化が著しく調整不明なものが多い。16は比較的大型となる。底径12.0cm。17は胴部への開きが少ない器形であり、あるいは廃底部かもしれない。18は17同様底部の器壁が薄い。21は底面がわずかにレンズ状になる。

甕（24～109）24は口縁部下に1条の沈線を巡らせる前期後半頃の甕で混入品。25～37は跳ね上げ口縁とならないものの。26・28は外端部が不明瞭な面を形成する。大半は口縁部の屈折が大きく内面に稜をもつが、30は屈折が弱い。34は口縁部上面に直交方向の沈線と刺突文を入れる。35



第33図 3号溝実測図① (1 / 60)



第34図 3号清実測図② (1/60)

~37は口縁部下に三角突帯を巡らせるが、全体的に見ると比較的大型のものに突帯を巡らせる傾向にある。口径は最も小さな28が29.6cm、最も大きな37が40.1cm。

38~55は外端部が明瞭な面をなすもの、または跳ね上げ口縁となるもの。40・45・54などは粘土紐を貼付して明瞭な跳ね上げ部を形成する。38~46は口縁部下に三角突帯のないもの、47~54は屈曲部から少し下がった位置に1条の三角突帯を巡らせるもの。大型品の55は2条の三角突帯を貼付する。38・42・43は胴部上半の縮まりがない器形となる。最も口径が小さな42は25cm、最も大きな55は62cm。

56は他よりも口縁部の開きが大きく水平に近づき、また口縁部下にM字突帯を巡らせる。細部にわたって作りがシャープで器壁も薄く、胎土も砂粒を含まず精良である。他の大半の土器の色調は黄褐色であるのに対し56は茶褐色を呈す。搬入品であろう。口径30.0cm、57・58は三角に近い未発達なL字状口縁のもの。口縁部下には低い三角突帯を巡らせる。59は比較的大型となる鶴先口縁部片。60も鶴先口縁の大型器。外端部は若干垂下する。口縁部下に不明瞭なM字突帯を巡らせる。焼成は他と比べてやや白っぽい。口径50.0cm。

61~97は底部片。61は高台状の高い底部であり前期末~中期初頭のもの。混入品。62~67は底部の裾が開かず端部も丸みを帯びるもの。68~83は端部が比較的シャープな稜をなすが裾の開きがないもの。84~97は裾部が開き、端部が縫合をなすもの。94は焼成後に底部穿孔を行う。

98~109は丹塗りの甕。98は底径が小さくわずかに上げ底となり、胴部下半は縮まった器形となる。最大径は上方にあり、そのやや下にM字状突帯を2条巡らせる。口縁部は水平近くまで開き、その下にもM字状突帯を1条巡らせる。全体的に器壁が薄く作りもシャープで、胎土も粗砂粒をほとんど含まず精良である。内面はナデ、外面はヘラミガキ調整。口径31.9cm、底径6.8cm、器高32.0cm。99・100も水平近くまで口縁部が開いた甕。口縁部下には台形突帯を巡らせる。101は口縁端部を跳ね上げ気味にし、屈曲部下には三角突帯を巡らせる。口径29.0cm。102・103は口縁部下にM字状突帯を巡らせるもの。どちらも胎土に粗砂粒を含まず精良。102は口径30.0cm、103は口径31.6cm。104は2条の台形突帯を巡らせる脚部破片。胎土に砂粒を若干含む。105~107、109は底部片。いずれも底径が小さく裾部の開きが見られない。105は外面にヘラミガキが認められる。胎土には粗砂粒を含む。107は底部に焼成後穿孔を行う。108はM字突帯の脚部片。

鉢（110・111）110は指ナデ整形の小型鉢。口径8.2cm、器高6.7cm。111はあまり見られない器形だが、一応鉢とした。胎土に粗砂を多く含み器面調整も難で粗い。口径17.0cm。

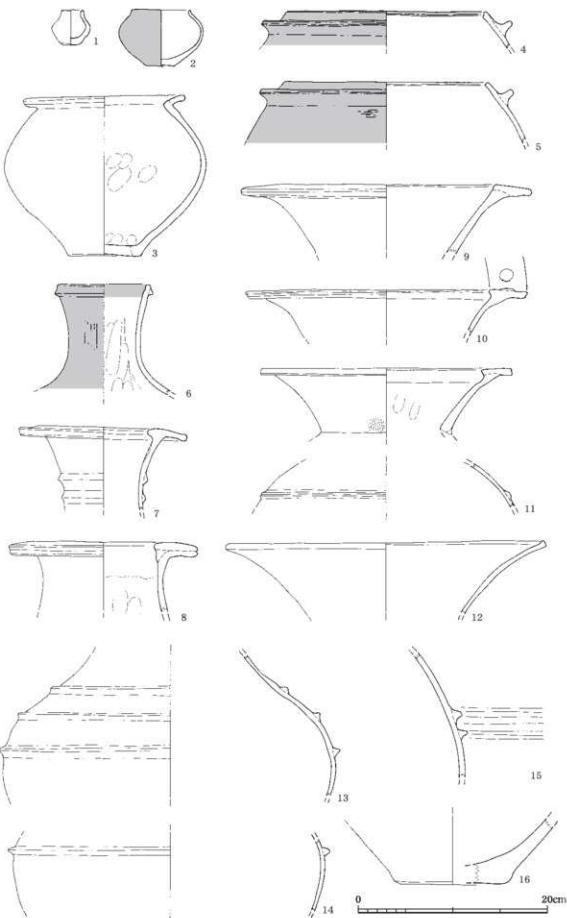
高坏（112~121）112は素口縁の高坏部片と考えた。端部は面をなす。外面に丹塗りが認められる。口径25.0cm。113は口縁部を短く水平に折り曲げる。外面は丹塗りまたは化粧土塗布。口径20.0cm。114は鶴先口縁のもの。口縁部は水平に長く伸びるが内側の突出は見られない。口径28.0cm。115は深みのある坏部と考えた。口縁部は鶴先口縁で内外に水平に伸びる。口縁部下には三角突帯を巡らせる。内外面丹塗り。口径32.0cm。116は丸く深みのある坏部に短い脚部が付く高坏。外面には丹塗りが認められるが内面は器表が風化しており不明。脚部内面にはハケ目調整を行う。裾部径15.4cm。117は接合部の充填粘土が剥離している。外面と坏部内面丹塗り。裾部径15.3cm。118~121は脚柱部。119は精良な粘土を使用するが器表風化のため丹塗り等は不明。120は外面丹塗り。

蓋（122・123）122は一応蓋として報告する。端部は跳ね上げ状に仕上げる。胎土が精良で色調も他と異なる。裾部径18.6cm。123は傘部が直線的に開く。

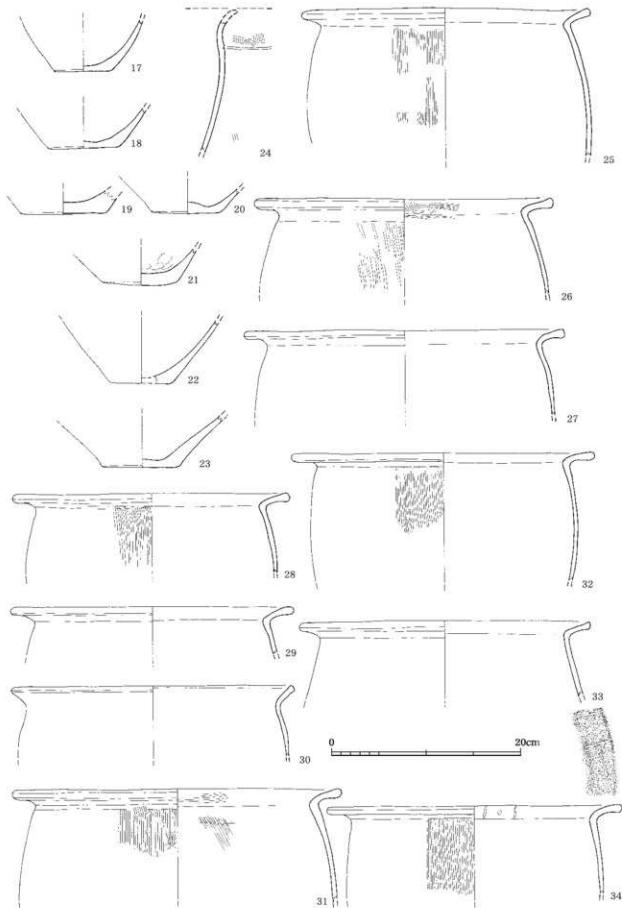
器台（124~126）124は中央部があまり縮まらない器形となる。口径8.6cm、器高13.4cm。125は中央部が縮まる。端部は四角く整形する。裾部径12.0cm。126は端部を内側にわずかにつまみ出す。裾部径10.2cm。

支脚（127~133）いずれも指ナデ整形で器壁の厚い支脚である。二次被熱による器壁の剥落が著しい。

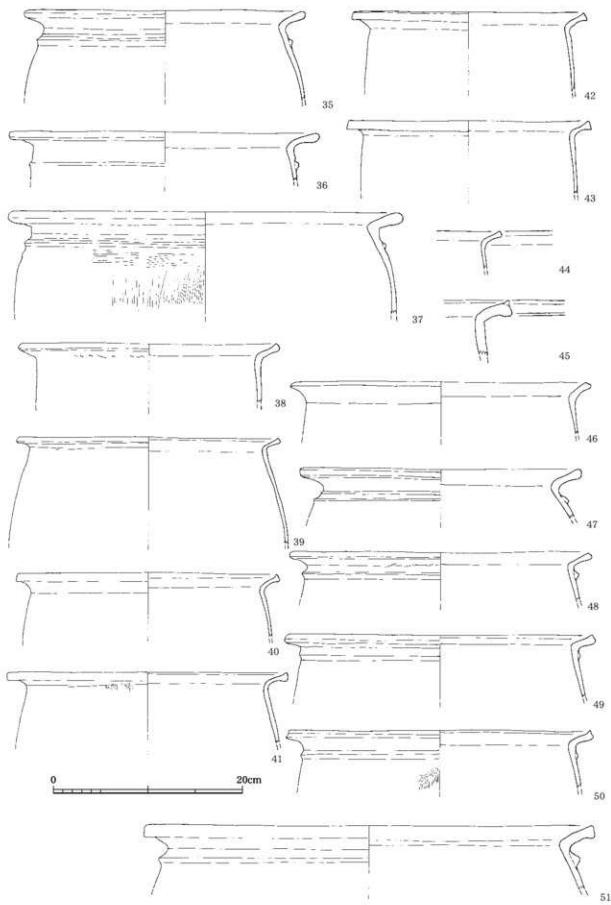
その他（134・135）134は蓋か。天井部には焼成前の穿孔を行う。天井部径7.2cm。135は何かの脚部であろうが器形不明。外面には丹塗りを行い、ヘラミガキ調整がつかずに認められる。裾部径5.6cm。



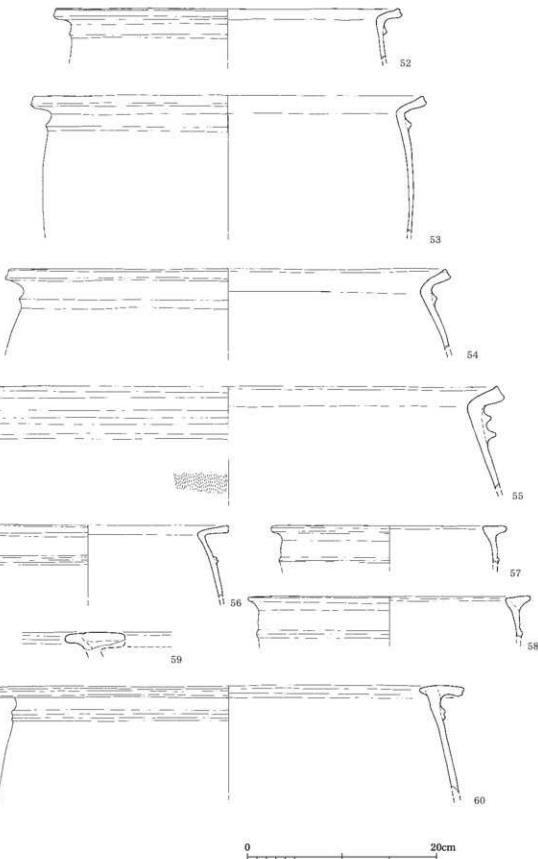
第35図 3号溝出土土器実測図① (1/4)



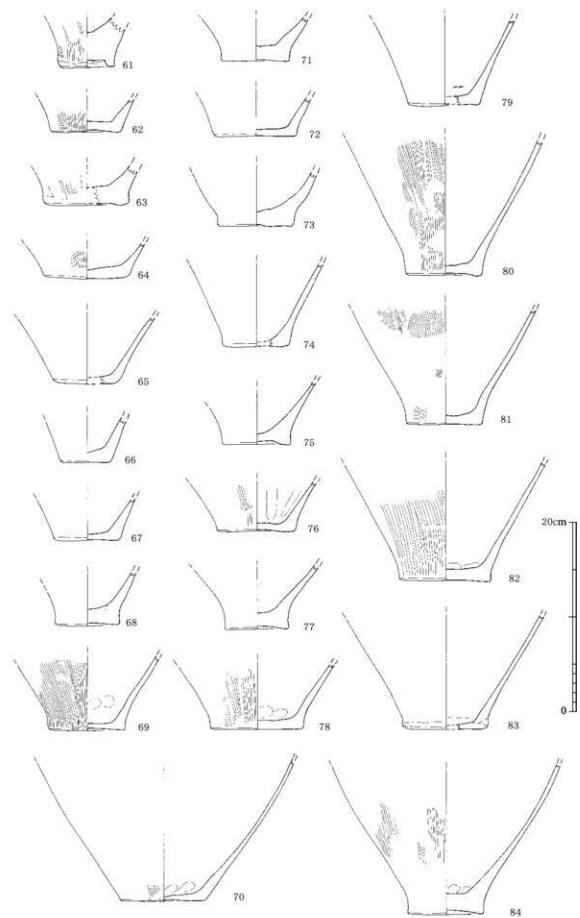
第36図 3号溝出土土器実測図② (1/4)



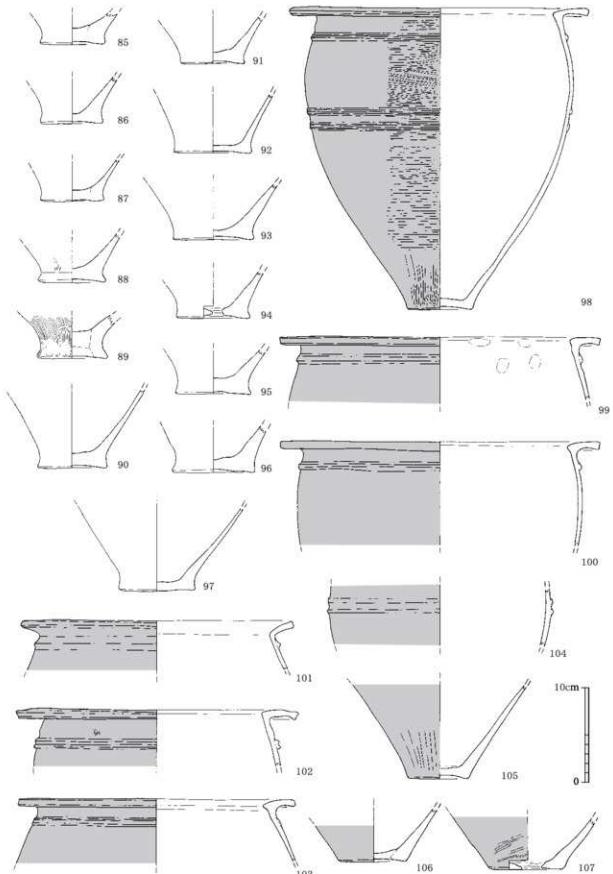
第37図 3号溝出土土器実測図③ (1 / 4)



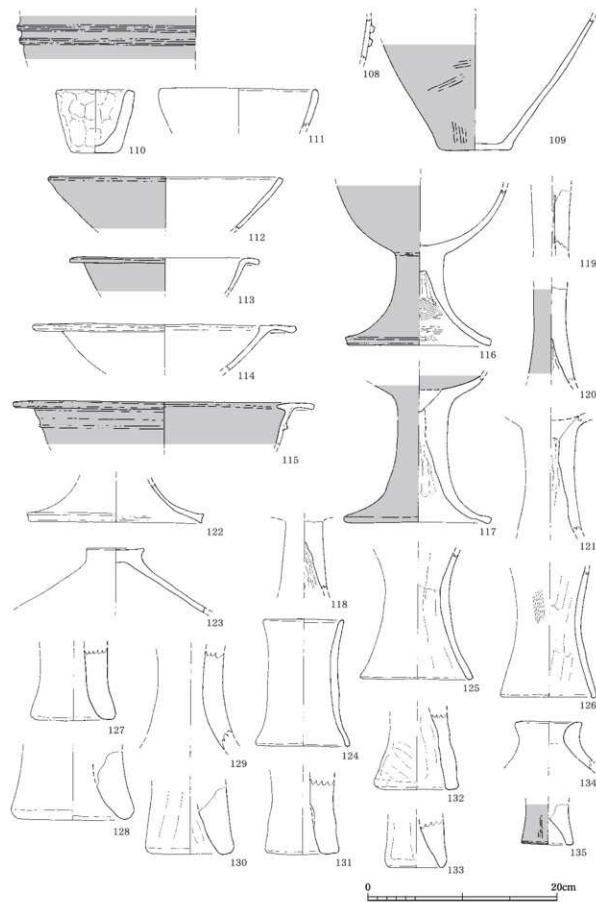
第38図 3号溝出土土器実測図④ (1/4)



第39図 3号溝出土土器実測図⑤ (1/4)



第40図 3号溝出土土器実測図⑥ (1/4)



第41圖 3号溝出土土器実測図(7) (1/4)

#### 4号溝

調査区西側にある南北に直線的に伸びる擾乱溝。調査時には4号溝と称していたため、報告では欠番とする。

#### 5号溝（図版13、第31・42図）

4号堅穴住居跡から南側へ直線的に続く溝で、この住居跡の排水溝として掘削されたものである。長さ12.5m、幅50cm、深さ30cm。

#### 出土土器（図版15、第43図）

壺（1～7）1は無頸壺。器壁がかなり薄い。口径14.0cm。2・3は勧先口縁部片。高坏の口縁部かもしない。2は長く伸びた口縁部の外側が若干垂下した形状となる。3は短く水平に伸びる。4・5は口縁部下に1条の三角突帯を巡らせる長頸壺。4は張りのある肩部に短い頸部が伸び、口縁部が若干開いた器形となる。外面全面と内面の口縁部付近のみ丹塗り。口径8.7cm、器高22.3cm。6・7は壺の底部片。6は底径7.0cm、7は底径7.2cm。

甕（8～12）8～11は甕の口縁部片。9以外は屈曲部下に三角突帯を巡らせる。8は跳ね上げ口縁となる。9は器壁が薄い屈折口縁の甕。口径26.0cm。10は口縁部の開きが弱い。口径30.0cm。11も跳ね上げ口縁となる。口径35.0cm。12は底部片。鋸が若干開き底面はわずかに上げ底となる。端部は明瞭な稜をなす。底径7.4cm。

鉢（13～15）小破片であり鉢ではないかもしれない。13・14は口縁部が短く湾曲して上方を向く。14は口径16.0cm。15は壺等の底部となるかもしれない。底径4.0cm。

高坏（16）16は高坏の脚柱部。外面丹塗り。胎土には粗砂粒を含み精良ではない。

器台（17）中央部があまり締まらない器形となる。内面ナデ、外表面は風化のため不明。鋸部径9.0cm。

#### 6号溝（第31・42図）

調査区南西側で検出した溝で、5号溝と重複しておりこれよりも古い。搅乱と削平により長さ3m程しか残っていない。幅40cm、深さ10cm。3号堅穴住居跡の排水溝の可能性もあるが、削平によって大部分を失うため判断のしようがない。遺物は少なく図示できるものはない。

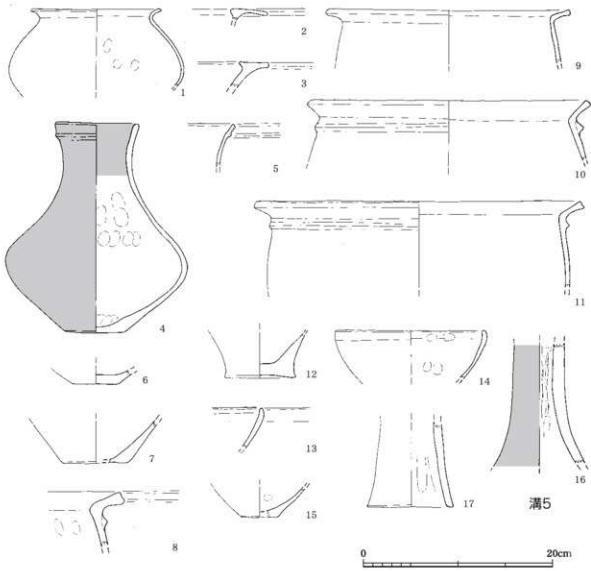
#### 7号溝（第31図）

6号堅穴住居跡から直線的に南へと伸びる溝で、この住居の排水溝として機能したものである。全長7.5m、深さは中央付近で60cm。遺物は図示した土器の他、第48図18の砥石状石製品が出土した。

#### 出土土器（第43図）

壺（18～20）18は内側に折り曲げたような形状となる壺または高坏の口縁部。外表面丹塗りで胎土も精良である。19・20は

第42図 5・6号溝実測図（1/60）



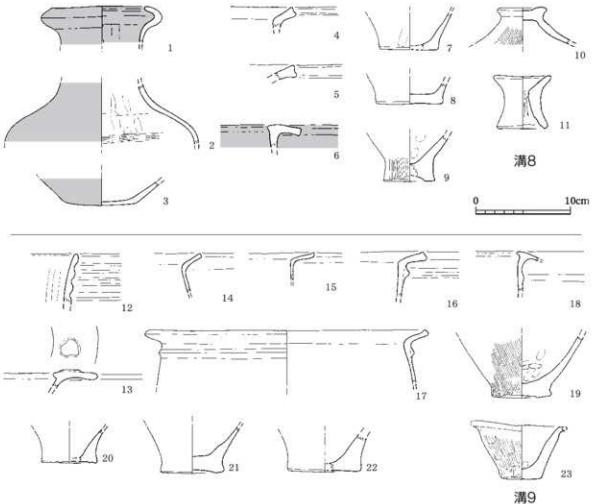
第43図 5・7号溝出土土器実測図（1/4）

底部片。19は底径6.0cm、20は底径10.2cm。

甕（21～23） 21・22は底部片。21は裾が開かず22は裾が若干開く。どちらも端部に明瞭な稜を有し底面はわずかに上げ底となる。21は底径7.8cm、22は底径8.6cm。23は丸みを帯びた器形の甕で、内面に横ヘラケズリを行うことから古墳時代のものであろう。外面はハケ目。

#### 8号溝（図版13、第13図）

5号堅穴住居跡から南西方向へ直線的に伸びる溝で、この住居の排水溝として機能したものである。南西端は1・2号堅穴住居跡と重複しており、これらよりも新しい。全長7m、深さは中央付近で40cm。



第44図 8・9号溝出土土器実測図（1/4）

#### 出土土器（第44図）

壺（1～3） 1～3は接合しないが同一個体。袋状口縁壺である。頸部は細く、湾曲度の強い口縁部へといたる。底部はわずかにレンズ状となる。外面と内面の口縁部付近は丹塗り。口縁端部径9.4cm。

甕（4～9） 4～6は口縁部片。4は口縁部が短く立ち上がり気味に開き、内面に稜を有して屈折する跳ね上げ口縁のもの。5もやはり跳ね上げ口縁。6は垂下した鶴先口縁となるもの。内面の突出は小さい。7～9は底部片。7は据の開きが少なく端部が明瞭な稜を有す。底径6.0cm。8は端部がやや丸みを帯びる。底径7.4cm。9は高台状に高くなる中期頭頃のもの。混入品。底径5.4cm。

蓋（10） 10は甕蓋である。天井部の端部は甕底部同様外側に開き、稜をなす。径7.1cm。

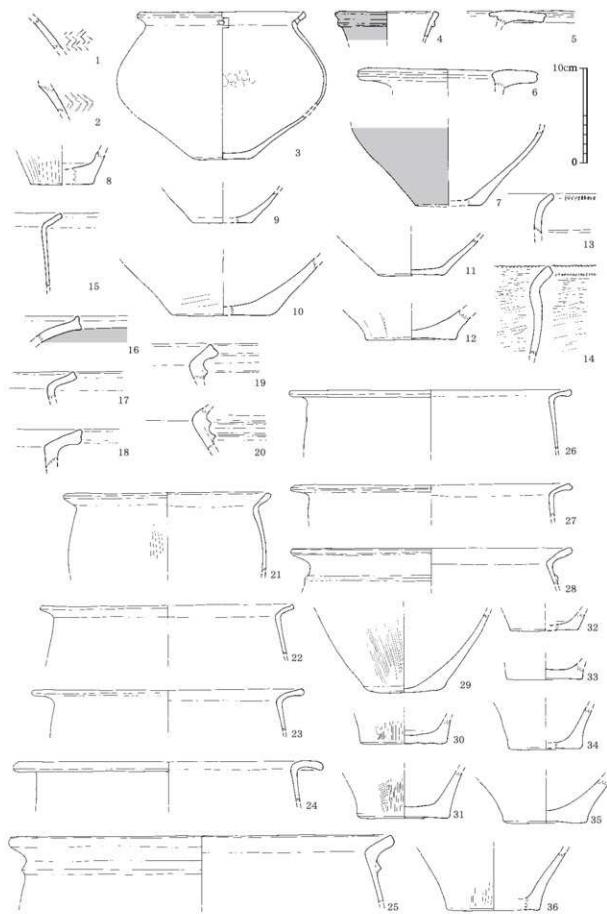
支脚（11） 11は小型の支脚である。受け部と脚部の境が中央より上方にあり、内側で明瞭な稜を有す。器壁は最も厚いところで1.4cmを測る。受け部径6.0cm、据部径5.4cm。

#### 9号溝（第31図）

調査区東側で検出した溝である。不整形で幅も一定しないが、主軸を南北にとっており、3号溝と合わせると集落域を方形に区画するような位置にある。全長8m、幅1～3m、深さは20cm前後。

#### 出土土器（図版15、第44図）

壺（12・13） 12は器表の風化や剥離が著しく、また細片であるため器形の復元に不安が残るが、外面の口縁部下に幅広で浅い凹線を巡らす直口壺として図化した。凹線は幅1cm、深さ2mm程度で、5mm間隔で3条確認できる。口縁端部は丸く仕上げている。胎土には石英・長石・雲母の粗砂粒を若干含む。色調は内面が黄灰褐色、外面が灰褐色。在地では見られない器形であり、搬入品であろう。讀岐を中心に近い形状のものが見られる。13は円形浮文を貼付する鶴先口縁部片。口縁部は水平に長く伸び、内側にも短く突出する。



第45図 その他出土土器実測図① (1 / 4)

**甕（14～22）** 14～18は甕の口縁部片。14は立ち気味に開くもの。端部は面をなす。器壁は薄い。15は大きく開き、端部を跳ね上げる。やはり器壁が薄い。16・17は口縁部下に三角突帯を巡らせるもの。口縁部は跳ね上げ口縁となる。16は胴部上半が縮まらず、直立する器形となるようである。17は口径30.0cm。18は垂下する鶴先口縁となる。口縁部下に1条の突帯を巡らせるようだが風化が著しく形状は不明。胴部上半は縮まらず直立する。19～22は甕の底部片。19は内面に指圧痕、外面にハケ目が見られる。底径6.3cm。20は裾部がほとんど開かず、端部は明瞭な稜を有す。底径6.0cm。21は裾がやや開くが端部は丸みを帯びる。底径6.7cm。22は裾が開かず直立した器形となる。底径9.8cm。

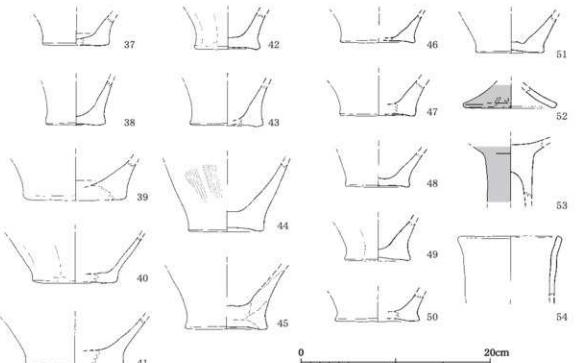
**鉢（23）** 23は小型の鉢である。体部は直線的に開き、口縁部は短く外反する。全体的に器壁がぐぐシャープさに欠ける。内面はナデ、外面はハケ目調整。4.3cm、器高6.2cm。

#### その他出土土器（第45・46図）

ここではピットや包含層などから出土した土器の説明を行う。

**壺（1～12）** 1・2は肩部に無軸羽状文を巡らす前期後半頃の壺肩部片。施文はヘラ状工具による。どちらもピット出土。3は無頸壺である。胴部中央に最大径があり、タマネギ状に胴部の張った器形となる。口縁部は跳ね上げており、口縁部穿孔を行うが欠損のため孔の数は不明。全体的に器壁が薄い作りである。器表の風化が著しく調整はほとんど残っていないが、内面にわずかに指圧痕が認められる。口径18.0cm、器高16.7cm。ピット出土。4は口縁部下に1条の三角突帯を巡らせる長頸壺。丹塗りを行ふ。口径11.0cm。包含層出土。5・6は鶴先口縁の壺である。遠賀川以東地域に見られる、頸部が長く伸びたタイプであろう。5はわずかに垂下した形状となる。内側への突出も長く、また外側は面を形成しながらも上端部を短く外側につまみ出したように仕上げる。遺構面出土。6は短く水平に伸びる。外側は丸く仕上げ1条の沈線を巡らせてある。内側にもわずかに突出が見られる。口径19.0cm。西側包含層出土。

7～12は底部片である。7は丹塗りを行う。底径に比べて胴部が張り、やや腰高の器形となるようである。底径7.0cm。西側包含層出土。8は開きが弱く甕に近い形状だが、外面に縱方向の幅の広いヘラミガキ調整が認められるために壺に含めた。底部は厚く、端部は明瞭な稜を有す。底径6.8cm。

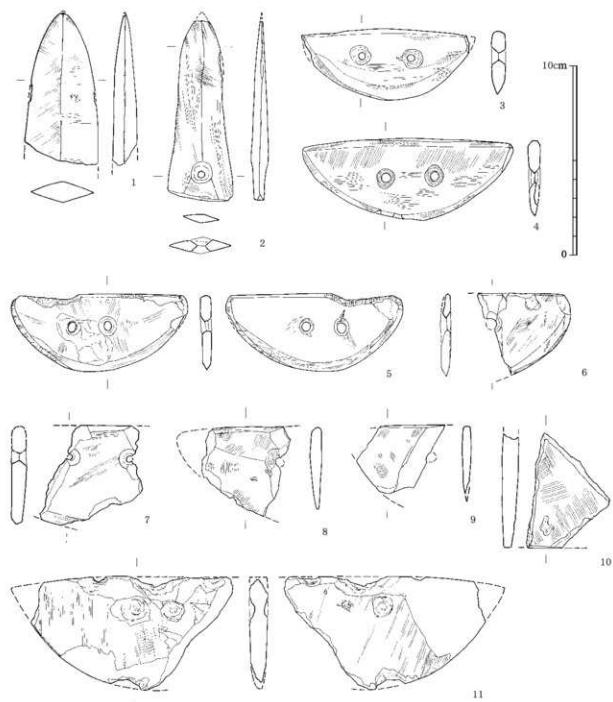


第46図 その他出土土器実測図②（1/4）

cm。西側包含層出土。9は比較的小型のものであろう。器表の風化のため調整は不明。底径6.2 cm。試掘時に出土。10は外面に幅の広いハラミガキが見られる。底径11.0 cm。表土掘削時に出土。11は器壁が薄い。無頸壺であろうか。底径6.8 cm。ピット出土。12はやや厚みをもった底部となる。底面はわずかに上げ底をなす。底径10.0 cm。ピット出土。

甕（13～51）13～28は甕の口縁部片である。13は口縁部下端に刻目を施し、口縁部下に1条の沈線を巡らせる弥生時代前期後半頃のもの。ピット出土。14は口縁端部の上下に刻目を施し、外面ハラミガキ調整を行なう遠賀川以東に見られる甕である。器壁が厚く、端部は強い横ナデによって平坦面を形成する。弥生時代前期末頃のもの。ピット出土。

15は屈折口縁の甕である。器壁が薄く、屈折の角度も弱い。端部はナデにより面をなす。包含層



第47図 石器・石製品実測図① (1/2)

出土。16は端部を明瞭に跳ね上げる。外面にかすかに丹塗りが認められ、あるいは壺になるかもしれない。ピット出土。17は不明瞭な跳ね上げ口縁のもの。包含層出土。18～20は器壁が厚い大型品である。風化のため調整はいずれも不明。18は短く屈折し、内面に明瞭な稜をもつ。端部はシャープな面をなすが、跳ね上げてはいない。試掘トレンチ出土。19も口縁部が短く屈折し、内面に明瞭な稜を有す。端部は明瞭な面をなし、上方へと尖る。外面の屈曲部よりわずかに下方に三角突帯を巡らせる。遺構面出土。20もやはり内面の屈曲部に明瞭な稜を有す。口縁部は欠損のため不明だが、屈曲部下に2条の三角突帯が見られる。遺構面出土。

21は肩がやや丸味を帯びた器形となる。口縁部はあまり開かず、端部はわずかに肥厚する。外面にはハケ目がかすかに認められる。口径 22.0 cm。ピット出土。22は口縁部が短く外折する。端部は跳ね上げ気味だが不明瞭である。口径 27.0 cm。包含層出土。23は口縁端部が肥厚するものの、跳ね上げるまでは至っていない。口径 29.0 cm。試掘トレンチ出土。24は口縁部の外反が大きく、ほぼ水平にまで開く。端部は丸くおさめる。ピット出土。25はやや大型のもの。屈曲部内面には明瞭な稜を有し、端部はシャープな面をなす。跳ね上げは認められない。屈曲部下には1条の三角突帯が認められる。口径 41.0 cm。包含層出土。26は端部が肥厚し、上方へとわずかに跳ね上げる。頸部はあまり縦まらない器形となるようである。試掘トレンチ出土。27は外端部に強い横ナデを加えてわずかに窪ませており、跳ね上げ状の効果を表すもの。頭部は縦まらない。試掘トレンチ出土。28は口縁部が直線的に開き、内面に稜を有す。端部は面をなすが跳ね上げではない。外面の屈曲部下に不明瞭な突帯を巡らせる。ピット出土。

29～51は底部片である。29は底部が薄く、胴下半部が丸味を帯びた器形となる。外面には継ヶ目が認められる。やや異質だが前期後半頃のものであろう。ピット出土。30は底端部から直立氣味に立ち上がる。包含層出土。31～36は縦があり開かない器形となるものである。端部は比較的明瞭な稜をなすものが多い。32・33は径が小さく、小型品であろう。31・34・35はピット出土、32は遺構面出土、33は包含層出土。36は試掘トレンチ出土。

37～51は裾がわずかに開く器形となるもの。42～50は特にその傾向が明瞭である。51はやや異質である。37・39は包含層出土、38・43・48・50は遺構面出土、40は試掘トレンチ出土、41・42・46・47・49はピット出土、44・45・51は表土掘削時に出土。

蓋（52） 52は小型の蓋である。おそらく無頸壺の蓋であろう。外面にはヘラミガキがかすかに認められ、丹塗りが施される。径 10.0 cm。包含層出土。

高坏（53） 53は高坏の脚柱部片である。脚部内面を除いて丹塗りを行う。胎土はあまり精良ではない。包含層出土。

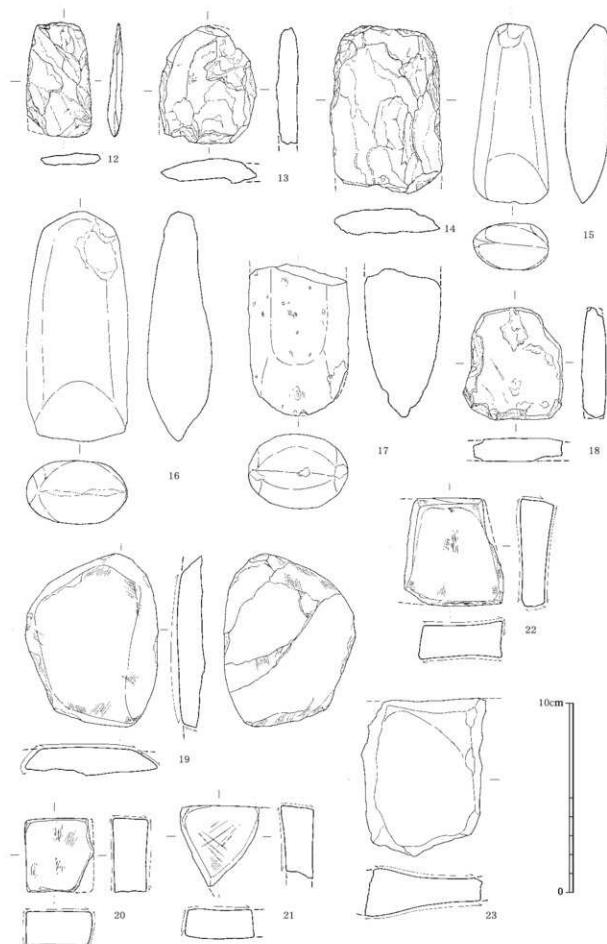
器台（54） 54は中央部の縒まりが少ない器形となるようである。端部は明瞭な面をなす。上端部 径 11.0 cm。遺構面出土。

#### 石器・石製品（図版 16、第 47～49図）

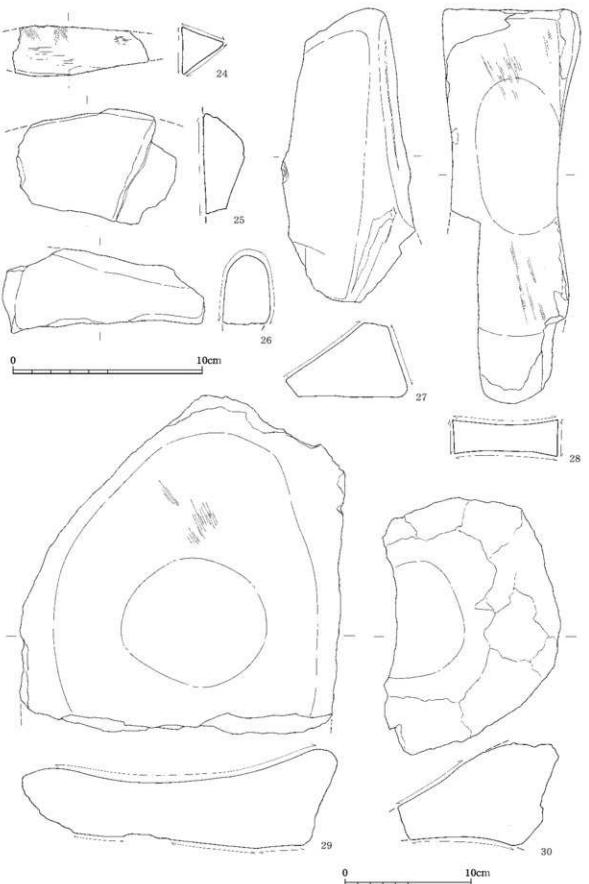
石剣（1） 1は頁岩製の石剣である。基部側を欠失する。両刃部及び先端部が刃こぼれ状に欠損するのは使用のためか。丁寧に作られ鎧も明瞭である。表面には研磨の際の擦痕が残る。現存長 8.0 cm、幅 3.9 cm、厚さ 11.0 cm。ピット出土。

石戈（2） 2は緑色片岩製の石戈である。切っ先と刃部の一部を欠損するがおおよそ完形。研磨は比較的丁寧だが整形に粗雑さが目立ち、石戈としてはかなり退化した形状である。基部の穿孔は1ヶ所のみ。現存長 9.45 cm、幅 3.5 cm、厚さ 0.9 cm。6号堅穴住居跡出土。

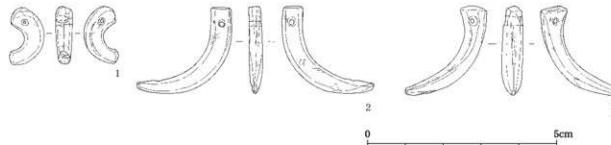
石包丁（3～11） 3～9は通称輝緑凝灰岩と呼ばれる石材を使用した石包丁である。すべて外刃刃。3～5はほぼ完形。3は再研磨が著しいもので、原形よりもかなり小さくなっているようである。現存長 8.9 cm、幅 3.7 cm、厚さ 8.0 cm。1号堅穴住居跡出土。4は研磨に粗さが目立つ。刃部は再研磨のためか片刃となる。長さ 11.1 cm、幅 4.3 cm、厚さ 0.7 cm。ピット出土。5もやはり長期間にわたって使用されたらしく、著しく小型化している。背部には敲打・粗い研磨痕が見られるが、



第48図 石器・石製品実測図② (1/2)



第49図 石器・石製品実測図③ (24~26:1/2, 27~30:1/3)



第50図 玉類実測図（1/1）

これは使用する際に握りやすくするための造作と思われる。また微かではあるが紐すれのために生じた擦痕も見られる。全長9.4cm、幅4.1cm、厚さ0.6cm。3号堅穴住居跡出土。6～9は欠損資料。6は現存長5.0cm、幅4.3cm、厚さ0.5cm。3号堅穴住居跡出土。7は長さ5.5cm、幅5.3cm、厚さは他のものよりもやや厚めであり0.8cm。包含層出土。8は長さ4.7cm、幅4.8cm、厚さ0.6cm。ビット出土。9は長さ4.6cm、幅3.6cm、厚さ0.5cm。4号堅穴住居跡出土。10・11は未製品である。10はやはり螺旋凝灰岩製。表面には粗い研磨痕が見られ、研磨段階で中止されたもの。長さ4.5cm、幅6.2cm、厚さ1.0cm。試掘トレンチ出土。11は頁岩製である。表面研磨後、紐通し孔を穿孔するための敲打段階で中止される。長さ10.7cm、幅5.9cm、厚さ1.0cm。3号溝出土。

打製石斧（12～14）12は小型の短冊形打製石斧。ほぼ完形である。緑色片岩製で風化が著しく剥離の稜線が曖昧なところがある。全長6.1cm、刃部幅3.4cm、基部幅2.2cm、厚さ0.8cm。ビット出土。13は打製石斧の基部片とを考えたが若干不安も残る。頁岩製で風化が著しい。全長6.4cm、幅5.2cm、厚さ1.4cm。包含層出土。14は比較的整った短冊形のもので泥岩製。刃部側に欠失する。全長8.9cm、幅6.0cm、厚さ1.3cm。包含層出土。

磨製石斧（15～17）15・16は完形。15は小型の磨製石斧。擦形を呈しており古い様相が残る。頁岩質砂岩製で風化が著しい。全長9.5cm、幅4.0cm、厚さ2.5cm。搅乱出土。16・17は安山岩質凝灰岩製の大型船刃石斧。16は基部側より刃部側が厚くなる。刃部には使用のために生じた刃潰れが見られる。全長12.2cm、幅5.4cm、厚さ3.4cm。3号溝出土。17は先端が丸く整った形状で刃潰れが少ないのである。断面形は円形に近く、厚みのある形状となる。現存長8.1cm、幅5.3cm、厚さ4.0cm。3号溝出土。

砥石（18～28）18・19は一応砥石として報告するが、使用石材が通常砥石には使わないものであり、使用目的を確定できない資料である。18は蛇紋岩製で、平面は両面とも丁寧に研磨し、側面は剥離調整後に一部研磨を行う。全長5.9cm、厚さ1.2cm。1号堅穴住居跡出土。19は緑色片岩製で、表面と剥離面の研磨の度合いが異なる。剥離面の研磨は粗雑で一部にしか及んでいない。研磨は側面にも行われる。全長9.2cm、厚さ1.5cm。3号溝出土。

20～24は小型品。20～22は泥岩製の砥石。砥面は複数面に及ぶ。20は5号堅穴住居跡出土、21はビット出土、22は1号堅穴住居跡出土。23は砂岩製の砥石で3号溝出土。24は粘板岩製で断面三角形を呈す。6号堅穴住居跡出土。25・26は中型品。25は10号土坑出土で泥岩製。26は砂岩製でビット出土。27～30は大型品で掘え置いて使用されたものである。全て砂岩製。27は16号土坑出土。28は6号堅穴住居跡出土で肌理の細かい砂岩を使用する。29・30は球状のものを研磨した砥石で、どちらも3号溝出土。顕著な使用により中央が丸く窪む。

#### 玉類（図版16、第50図）

勾玉（1～3）すべて11号土坑出土品である。1は蛇紋岩製の小型勾玉。孔は両面穿孔。長さ1.5cm、厚さ0.45cm。2・3は牙玉に似た特異な形状の勾玉。どちらも蛇紋岩製で丁寧な作りである。孔は片面穿孔による。2は長さ3.1cm、幅0.55cm、厚さ0.35cm、3は長さ3.0cm、幅0.4cm、厚さ0.55cm。

## IV おわりに

これまで記述してきたように、彼岸原遺跡第1次・第2次調査では、弥生時代と古代の遺構・遺物を見た。主要遺構として円形堅穴住居跡7棟、掘立柱建物跡5棟、土坑17基、溝9条があるが、これらのうち1~3号掘立柱建物跡は古代、8号土坑は時期不明、4号溝は近代以降の擾乱であり、それ以外は全て弥生時代の所産である。弥生時代前期後半頃の貯蔵穴である14~16号土坑を除いて他の全てが弥生時代中期後半に比定されるものであり、今回の調査で主体となる。以下、弥生時代中期後半の様相について概観し、まとめとしたい。

### 出土土器

出土土器を見てみると、壺・甕・鉢・高杯・器台・支脚・蓋といった弥生時代中期を代表するほぼ全ての器種が出土し、また精製器種である丹塗磨研壺・甕・高杯も少なからず見られる。

壺のうち広口壺については鷺先口縁と素口縁の両者があるが、前者の方がが多い。鷺先口縁壺には、頸部が細長く縊まり多条突帯や円形浮文などが見られる、主として遠賀川以東地域に分布する広口壺と、胸部の付け根から外反して大きく開く遠賀川以西に多い広口壺の双方がある。無頸壺は小型で肩が張った器形となる。第45図-3のように端部を上方に跳ね上げ気味に仕上げるのは遠賀川以東地域の甕の口縁部形態から影響を受けたものであろう。長頸壺は口縁部直下に一条の三角突帯を巡らせる直口壺が少なからず見られる一方で、第28図-1~2の円形浮文を貼付する外反口縁の長頸壺、第44図-1~3の袋状口縁壺も例外的に認められる。一条突帯の直口壺は胴部と頸部の境目が不明瞭で、頸部の伸びが少ない古いタイプのものである。第44図-12は四線文の直口壺として団化しているが、風化の著しい細片資料であるため断言できない。可能性のあるものとして提示するに留める。

甕は丹塗磨研の精製品や大型品を除くとほとんど全てが屈折口縁である。大半が外端部に強い横ナデを加えて面を形成するか、または端部をわずかにつま上げて、いわゆる跳ね上げ口縁とするものであり、両者の折衷形も少なくない。これらは從来から遠賀川以東地域の要素として理解されてきたものであり、明瞭な跳ね上げ口縁のものが相対的に新しく位置付けられるが、遺構からの出土状況を見ても明確に区別できるわけではない。また中には端部を丸く仕上げるものも見られるが、この特徴の甕は筑後川中流域に分布の中心を置くものであり、当地域との交流の所産によるものであろう。逆L字状や鷺先口縁の甕がほとんど見られない点はこの地域の特徴の一つとして挙げても良いかと思われるが、これは地理的環境を考えると興味深い。丹塗磨研の甕は逆に大半が鷺先口縁となるが、これは丹塗磨研甕の器形に対する強い規制の表れ、もしくは直接的な搬入品とみるべきであろう。丹塗磨研の甕の中には胎土や調整において在地産と全く異なり、確定な搬入品と判断できるものもある。胸部は上半が内傾し、若干丸みを帯びた器形が一般的となる。底部に関しては、底みがあるものといいもの、底面は平坦かもしれないが若干上げ底、端部が開いて明瞭な稜をなすものなどがある。底部が極端に厚いものは時期的に遡るであろうが、その他の差異に関しては、時期差というより個体差として理解される範囲内にある。

鉢は半球状で口縁部が直立する素口縁のものと、指ナデ調整の小型粗製品があるが、他器種と比べて個体数が少ない。高杯は杯部が半球形で素口縁のものと、浅い杯部で鷺先口縁、屈折口縁となるものとがあり、鷺先口縁がもっとも多い。鷺先口縁は水平に伸びるものと垂下したものとがある。脚部も長脚、短脚の双方があるが極端に長い例はない。なお、どの器形にも丹塗磨研があり、丹塗磨研のものとそうでないものは器形の上の区別はない。

器台は受け部と裾部の開きにほとんど差がなく、上下の区別がつかないものが多い。器壁はほぼ一定の厚さを保つが、第30図-42のように屈曲部に稜線を有したものもある。支脚は器壁が厚く指ナデ整形による粗製品が多い。なお筒形容器台は萼部破片が1点見られるだけで全体の器形が判る例はない。蓋には甕蓋と壺蓋がある。甕蓋は器高があり高くなく、天井部は甕の底部と同様端部が明瞭な稜をなす。壺蓋は無頸壺に対応する蓋で、天井部が尖った笠形になる。

以上のことと踏まえた上で土器の様相を概観すると、まず壺においては遠賀川以西系の広口壺と以東系の広口壺とが双方少なからず存在し、分布域の境界に位置する本遺跡にとっては理解しやすい出土傾向となった。壺は屈折口縁、特に端部を跳ね上げる壺が多く見られ本遺跡の主体をなす一方で、福岡平野を中心に分布する鶴先口縁の壺はほとんど見られず、対して丹塗りの壺は鶴先口縁が圧倒的に多い点は興味深い結果となった。この地域では弥生時代中期前半頃までは逆L字状口縁が少なからず見られるが、中期後半になると極端に減少するようである。高环やその他の器種については一通りの代表的な器形が出土し、併存関係を知る上で重要な資料となった。なお、これらの土器は一部の混入品の除いてほぼ弥生時代中期後半、いわゆる須玖II（古）の範疇に納まるものであり、検出した遺構も切り合いの上では新古の別はあるものの、土器相の上の時期差は特に認められない。

#### 検出遺構

まず堅穴住居跡については、小型の堅穴住居跡と大型の堅穴住居跡とに分けられる。円形プランで中央に土坑、壁際に壁溝を巡らせ、壁溝と中央土坑との間に主柱穴をほぼ等間隔に配置する点では全て共通する。中央土坑は覆土中から炭・焼土が全く検出されないことから、炉として機能したものではない。主柱穴は住居の大きさに応じて数を変え、小型の住居では4~6本、大型の住居は配置に不明確さが残るが、およそ8本程度になるようである。なお6号堅穴住居跡の中央土坑に接して2つの小ピットがあり、不確定ではあるものの棟持柱穴の可能性も残る。壁溝は排水を目的とし、南側へと長く伸びる排水溝を付設する住居跡が3棟ある。このように排水溝を持った住居跡は県内ではあまり見られないが、丘陵部の集落遺跡にこのような屋外排水施設をもつものがあり、地形の傾斜を有効利用する事例として重要である。また今回の堅穴住居跡は全て円形プランであった。近隣の発掘調査で確認された中期後半の住居跡検出事例を散見するとすべて円形プランを探用するようだが、同じ嘉穂盆地でも南部に位置する嘉麻市や、さらに南方の古處山地を越えた朝倉郡域では方形プランを採用する例もあり、これが地域的特徴と認められるものなのか、あるいは集落を造営した集団個々の選択的採用の所以なのか興味深いところである。

計7棟の堅穴住居跡はおそらく地形の条件の上であろうがすべて調査区の中央に位置し、重複しながら集中する傾向にあり、この区域を居住空間としていたことが判る。これら住居跡群の東には、倉庫棟の1号・5号掘立柱建物跡があり、この区域が倉庫域となる。さらに調査区の北側には3号溝を主体とする溝が直線的に伸びており集落の外部と内部とを区画する役割を果たす。3号溝と直交する位置にある9号溝は、削平によって途切れたり曖昧な点も残すが、3号溝と一連の区画溝と想定される。5号掘立柱建物跡は区画の外にすることになるが、これは集落成立当初に9号溝が掘削されたものほどなくして埋没し、その後5号掘立柱建物跡が建てられたためであり大まかな分布領域に変更はない。すなわち集落の成立当初から廃絶期に至るまで居住域、倉庫域およびこれらを取り囲む区画がほとんど変化なく存続していたことになり、当時の集落構造や集落造営に関する内部規制が把握できる貴重な成果となった。なお1~3号溝の状況から集落は西側の調査区外へと伸びており、集落全体の構造把握については今後の調査の進展を期待したい。

今回の彼岸原遺跡第1次・第2次の発掘調査の結果、特に弥生時代中期後半の豊富な出土遺物に加え、当時の集落様相が窺える遺構群を確認することができた。弥生時代中期後半の土器群はほとんど時期差が無く、特に17号土坑出土土器は一括性の高い資料であり、3号溝出土土器も溝としての性格上厳密な一括性には欠けるが、それに次ぐ資料として貴重な成果となった。また遺構群は配置も含めて当時の集落構造把握のための良好な資料となり得る。これまで当該期の良好な資料にはあまりれていたかっただけに、嘉穂盆地における弥生時代の動向を窺う上で今回の調査成果が果たす役割は少なくないものと思う。

# 図 版



1 第1次調査区西半部  
全景（東から）



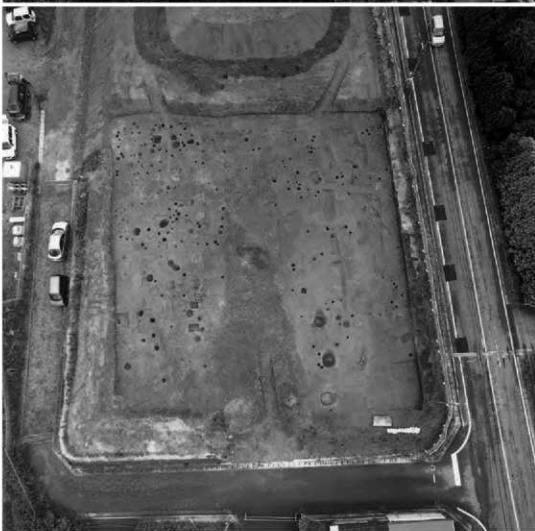
2 第1次調査区東半部  
全景（東から）



3 第1次調査区中央  
断面土層（東から）



1 第2次調査区西半部  
全景（北上空から）



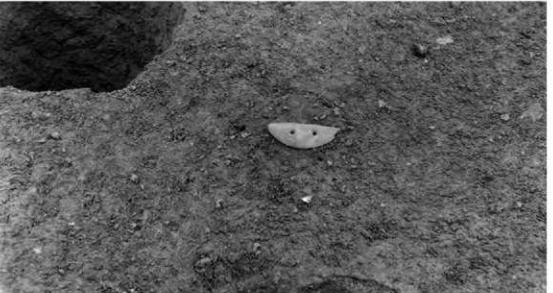
2 第2次調査区東半部  
全景（東上空から）



1 1号竖穴住居跡  
(上空から)



2 1・2号竖穴住居跡  
(西から)



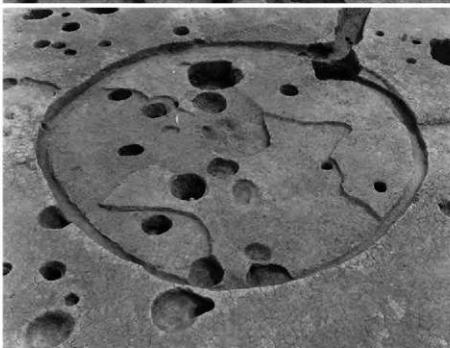
3 1号竖穴住居跡  
石包丁出土状態



1 3・4号竪穴住居跡  
(東から)



2 5号竪穴住居跡・8号溝  
(北から)

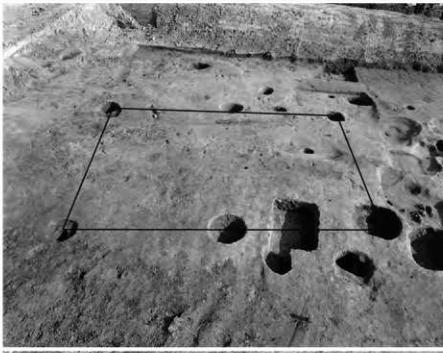


3 5号竪穴住居跡掘り方  
(北から)





1 4号掘立柱建物跡  
(北から)



2 5号掘立柱建物跡  
(北から)



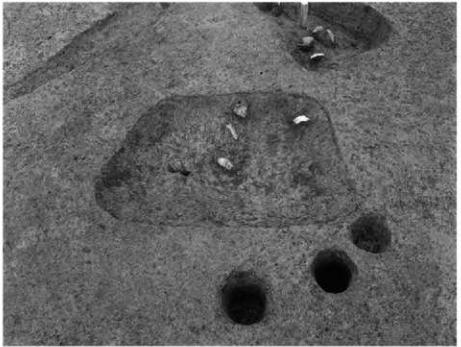
3 5号掘立柱建物跡  
P-5 (南から)



1 1号土坑(南から)



2 2号土坑(南から)



3 3号土坑(東から)



1 4号土坑（南から）



2 5号土坑（南から）



3 7号土坑（北から）





1 11号土坑（西から）



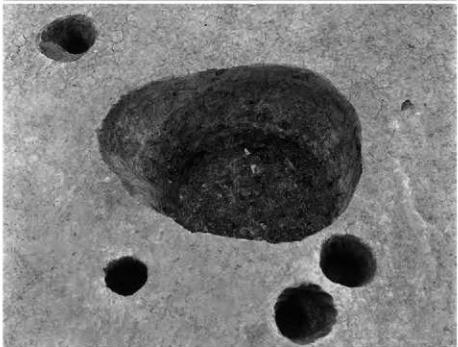
2 12号土坑（北から）



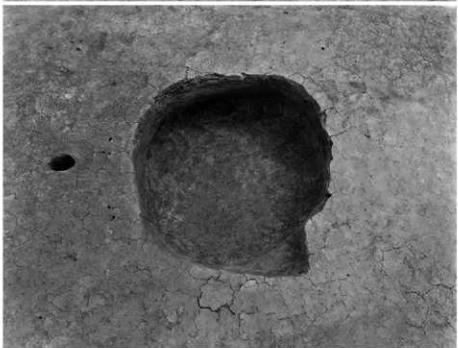
3 13号土坑（南から）



1 14号土坑（西から）



2 15号土坑（南から）



3 16号土坑（北から）



1 17号土坑（北から）



2 1・2号溝断面土層（東から）



3 3号溝遺物出土状態（東から）



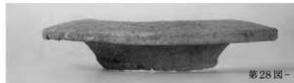
1 3号溝遺物出土状態  
(南から)



2 5号溝（北から）

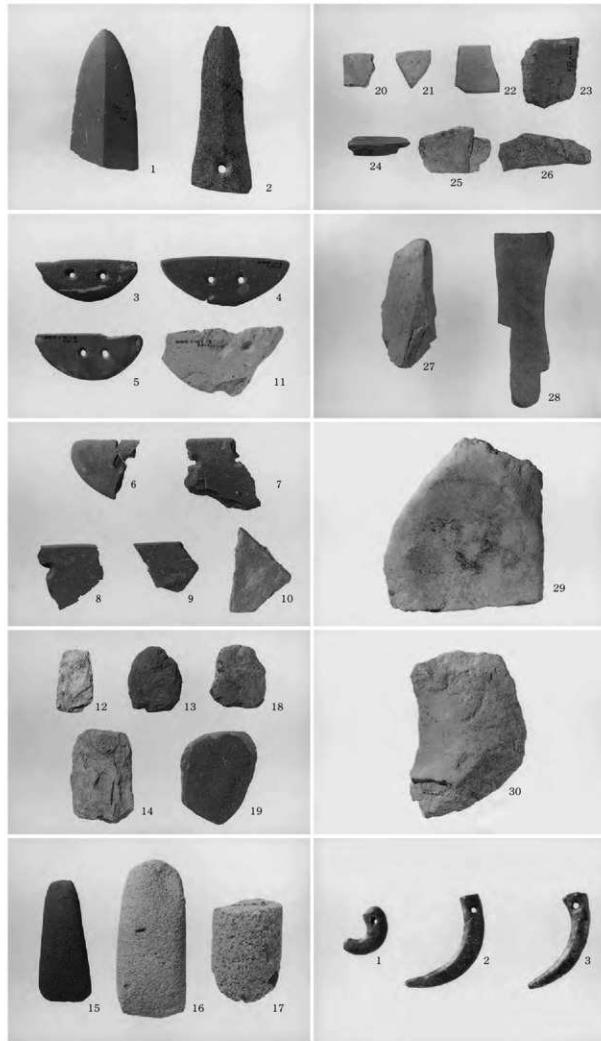


3 8号溝（北から）





出土土器 ②



出土石器·石製品·玉類

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひがんぱるいせき						
書名	彼岸原遺跡						
副書名	県営彼岸原団地建替事業関係埋蔵文化財調査報告						
卷次							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第216集						
編著者名	吉田東明						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号						
発行年月日	2008年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	'		
ひがんぱるいせき だいにじょうさ	いいづかし					2006.01.16 ～	
彼岸原遺跡 第1次調査	おおあざべんぶん			33°	130°	2006.01.27	160
ひがんぱるいせき だいにじょうさ	飯塚市	402052	450100	37'	39'	2006.04.12 ～	
彼岸原遺跡 第2次調査	大字弁分			12"	00"	2006.06.30	2,360
	614						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
彼岸原遺跡 第1次調査	集落跡	弥生時代	堅穴住居跡7棟 掘立柱建物跡2棟 土坑17基 溝8条		弥生土器 石器 石製品 玉類		
彼岸原遺跡 第2次調査		古代	掘立柱建物跡3棟		須恵器		

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 19	登録番号 8

### 彼岸原遺跡

福岡県文化財調査報告書 第216集  
平成20年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7-7

印刷 マツオ印刷株式会社  
嘉麻市上山田407